主は、生きておられる

Unser HERR lebt



Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.33 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt



メッセージ

4 わたしたちの生活における主のご目的　ゴットホルド・ベック

12人の証し

12 すべてのことは主がしてくださった。しかも最善であった　鍋島聖一

16 みことばは道の光です　鍋島恵二

21 肉の自分には何もない　鍋島悟

27 イエス様が私を変えてくださいました　上田日出海

34 主にあって喜ぼう　岩本秀造

41 今知らず、後悟るべし　松見とみえ

49 生活の一コマから　小田道夫

55 神、その道は完全　神澤毅

63 イエス様を信じてください　神澤圭子

73 共におられる主　鈴木勇士

82 きょう救いがこの家に来ました　加藤明美

88 主からいただくあふれるばかりの恵み　竹原庸光

わたしたちの生活における主のご目的

ゴットホルド・ベック

あなたがレビ人をイスラエル人のうちから分けるなら、レビ人はわたしのものとなる。こうして後、レビ人は会見の天幕の奉仕をすることができる。あなたは彼らをきよめ、彼らを奉献物としてささげなければならない。彼らはイスラエル人のうちから正式にわたしのものとなったからである。すべてのイスラエル人のうちで、最初に生まれた初子の代わりに、わたしは彼らをわたしのものとして取ったのである。・・・「これはレビ人に関することである。二十五歳以上の者は会見の天幕の奉仕の務めを果たさなければならない。」（民数記　8・14～16、24）

イスラエル人が迷ってわたしから離れたときもわたしの聖所の任務を果たした、ツァドクの子孫のレビ人の祭司たちは、わたしに近づいてわたしに仕え、わたしに脂肪と血とをささげてわたしに仕えることができる。――神である主の御告げ。――彼らはわたしの聖所にはいり、わたしの机に近づいてわたしに仕え、わたしへの任務を果たすことができる。・・・これが彼らの相続地となる。わたしが彼らの相続地である。あなたがたはイスラエルの中で彼らに所有地を与えてはならない。わたしが彼らの所有地である。（エゼキエル　44・15～16、28）

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

主なる神様が考えておられることは、一人でも多くの人が救われることですが、そればかりではありません。救われた一人ひとりを通して、主のご臨在が外に現されていくことも主が願い求めておられることです。

私たちの内に住まわれる主イエス様、「内住の主」こそ、私たちが新しく生まれ変わった証拠です。周囲の人々は、私たちの内に主イエス様が住んでおられることに気づくはずです。そのように身をもってイエス様を証ししてはじめて主の証し人と言えるでしょう。

わたしたちの生活における主のご目的

はじめに掲げた民数記8章には「会見の天幕」で奉仕をし、契約の箱を担う務めを担ったレビ人について書いてあります。14節では「あなたがレビ人をイスラエル人のうちから分けるなら、レビ人はわたしのものとなる」と主がおっしゃっています。15節を見ると、レビ人はまったく神に捧げられた主への「奉献物」であったことが分かります。あますところなく自分のすべてを神にお捧げしたレビ人こそ、主のご栄光を現すことのできる模範と言わなければなりません。ここでレビ人について考えてみます。

レビ人

レビ人とは、イスラエルの民が四十年間、荒野を旅したとき、主のご臨在を現す契約の箱を担って歩いた人々でした。イスラエルの人々は、主のご臨在の雲の柱が上に立つと、それまで宿営していた場所を出発し、雲の

柱に導かれて進みました。そして、雲が再び動かなくなったところに、とどまりました。レビ人たちは神の臨在の雲がとどまったときには、従順にそこにとどまりました。たとえそこが宿営に適しない場所であっても、また、どんなに人間の目には良くないと思える所でも、主の導きのままにとどまったのです。

ところで、私たちはどうでしょうか。主の導きのままに歩むのでしょうか。それとも、自分の考えのおもむくままに良い環境を選んで、そこへ行くのでしょうか。しかし、実際のところ、私たちが生きているこの世界はどこへ行っても荒野のようなものです。一見すると居心地のよさそうな所であっても、実際に住んでみれば、しばらくしてそこも荒野であったことが分かります。

主の御手の置かれたところにこそ、主のご臨在が現われてくるのですから、私たちもレビ人と同じように主の導きのままに歩みたいものです。

さて、主のものとされたレビ人には三つの特徴がありました。それは、心から神を礼拝し、人々に仕え、悪の霊に対して闘うということです。この三つの特徴は、主なる神様が私たち信仰者の日々の生活に求めておられることです。

真の礼拝

真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。

（ヨハネ　4・23）

礼拝とは何でしょうか。

父ならびに御子イエス様の偉大さを認め、どれほど尊いお方であるかを心から言い表すことが礼拝です。私たちは、自分自身の姿――神様から離れ、役に立たなくなっており、罪深く無力な状態――を見ながら、それと同時に憐れみ深い主イエス様の御救いを心の目で見るとき、礼拝せずにはいられなくなります。ですから、キリストに属さず、主である神様のご愛も偉大さも知らない人々は、礼拝することができません。

主の偉大さに心の目が開かれることは、礼拝にとって本当に必要なことです。しかし、すでに御救いに与っている信仰者でも、主の価値を完全に知ることはできません。主の偉大さを完全に知るには、永遠のときを必要とすることでしょう。もっともっと心の目が開かれて、主がどんなに素晴らしく偉大なお方であるかを、見させていただきたいものです。

主イエス様の偉大さを知れば知るほど、私たちは真の礼拝へと導かれ、また、主なる神を礼拝すればするほど、主の偉大さが見えてきます。心から礼拝する人は、神様の隠れた新しい真実を教えられます。

主を見た人々は主の御前にひれ伏し、拝まざるを得なくなります。高く引き上げられ、天に御位をお定めになられた主イエス様のご支配が私たちの内にも現実となる時、心からの礼拝を捧げることができます。

私たちはどうでしょうか。私たちの生活の中心に主がおられ、主なる神様への真の礼拝がなされているでしょうか。あるいは、主への礼拝が第一の場所を占めることなく、この世への心遣いがそれにとって代わり、主を礼拝することはどこかへ影をひそめてしまっているのでしょうか。神の憐みによって救われた者として、「礼拝する者」として毎日を生きているでしょうか。

主なる神様は、あまねく全地を見まわし、心をまっとうして礼拝をする人々を探し求めておられます。主なる神への礼拝は、私たちの生活の第一の場所を占め、礼拝こそが私たちの生活を支配していなければならないはずです。

わたしたちの生活における主のご目的

人々への奉仕

レビ人の第一の特徴は、真心から神を礼拝することです。そして、二つ目の特徴は「人に仕えること」つまり、ご奉仕です。ご奉仕とはいったいどういうものでしょうか。

イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」
（ヨハネ　6・29）

「神のわざです」とは、神様に対するご奉仕なのです。これは本当に不思議なご奉仕の定義です。「まことのご奉仕は信仰の現われ」なのです。たとえ私たちが全生涯を捧げ、持っているものすべてを捧げたとしても、信仰がなければそこにはご奉仕はありません。「ヘブル人への手紙」の著者は言っています。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じなければならないのです。
（ヘブル　11・6）

信仰をもたずに神に近づくことはできません。同じように、信仰なくしてご奉仕することは無意味です。主なる神にご奉仕するということは、信仰の働きです。

ところで、信仰、つまり神を信ずるとは何を意味しているのでしょうか。信仰とは、神にゆだね、任せ切ることです。例えば、もし、それが神のみこころであると確信するなら、惑わずためらわず前進する、これが信仰です。ところが、私たちは何かことを始めるに当たり、最初のうちは不安で自分に何の力もないこと、無能さをよく知っており、主に頼っています。しかし、やっているうちに次第に効果が現われてきて結果がよさそうに見えてくると、自分はできる、と思い込んでしまいます。これは危険です。私たちのご奉仕は、瞬間、瞬間、主を見上げ、主により頼み、すがっていくご奉仕でなければ役に立ちません。

旧約聖書を読むと、レビ人は驚くほどたくさんのご奉仕をしたことが書かれています。レビ人はそのご奉仕において、決して自分の力・能力にはより頼まず、ただ主の力にのみより頼んでなしたことが分かります。私たちのご奉仕も、信仰の現われでなければなりません。もしそうするなら、どんな小さなことも、まことのご奉仕になるはずです。

何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。（コロサイ　3・23）

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。
（1コリント　10・31）

わたしたちの生活における主のご目的

信仰をもって主の御栄えのために行うなら、それはまことのご奉仕です。自分の考え、伝統にとらわれず、ひたすらただ主により頼み、よりすがって歩みたいものです。私たちの生活がまったく主のご支配のもとにあることが証しできるよう、生活すべてを主に捧げたいものです。

三つ目のレビ人の特徴は、悪の霊と闘うことです。

悪の霊に対する闘い

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。
（エペソ　6・12）

悪魔は、神の御業のために心を尽くしてご奉仕しようとしている人を、集中的に攻撃してきます。神に用

いられ、主のご臨在を現す契約の箱を持ち運び、まことのご奉仕に適う人々は、地獄の憎しみの真ん中に置かれ、サタンの攻撃目標となっています。逆に、もしサタンの攻撃の的として立たされていないなら、私たちの礼拝とご奉仕が根本から誤っている可能性があります。この闘いは厳しく現実的なものです。

しかし、主は完全な勝利を収められました。私たちはこの厳しい闘いの中にあっても、主が成し遂げてくださった完全な勝利を堅く信じなければなりません。サタンはすでに打ち負かされた敗北者でしかないのです。

不安やさまざまな思い煩いにより、周りを見てまた行く末を考えて恐れることは無益なことです。天で父なる神の右に坐しておられる主から目をそらす瞬間に、私たちは証し人としての力をなくしてしまいます。ふつうの世人と同じような状態になってしまいます。イスラエルの民を取り巻く敵たちは、会見の幕屋を見たとき、その上にとどまる主のご臨在をも見ました。同じように、主を知らない方々が私たちの間に来るとき、私たちのうちに光り輝く主を見ることができるでしょうか。それとも、失望して元気のない惨めな人々を見るのでしょうか。

主イエス様がすでに完全な勝利者となられたのですから、私たち自身は勝利者ではなく、またそうなる必要もありません。しかし、私たちの闘いは勝利から始まり、勝利で終わります。どんなにサタンの力が強く、攻撃が激しくても、私たちは主イエス様の勝利のうちに堅く立っていなければなりません。

私たちは果たして、主イエス様の勝利の真ん中に立っているでしょうか。聖書ではなるほど、主の勝利が告げられています。また私たちは過去に勝利を収めたかもしれませんが、今、主の勝利の中にいるでしょうか。ご臨在の雲は私たちの上にとどまっているでしょうか。

私たちは神に喜ばれる者となっているでしょうか。私たちの目は主の偉大さに見開かれ、真の礼拝者になっているでしょうか。私たちは全身全霊をあげて、主により頼んでいるでしょうか。それとも、私たちのご奉仕は肉の力でなされているのでしょうか。あらゆる問題の中に、主イエス様の勝利がもたらされ、私たちはそれを喜ぶことができているでしょうか。

私たちはレビ人のように、主なる神様を礼拝し、人に仕え、悪霊と闘う者になりたいものです。そして、主のご臨在を現していきたいものです。

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。（1コリント　6・19〜20）

わたしたちの生活における主のご目的

すべてのことは主がしてくださった。しかも最善であった

鍋島　聖二



左から聖一さん、お母さまの美知さん、お父さまの永一さん、次男の喜満さん、妻の薫さん

私は一九六四年、父永一、母美知の間に五人兄弟の長男として高知県に生まれました。貧しい暮らしの中で育ちました。父は自動車整備工として働いていました。酒を飲むことが好きで、毎晩晩酌をするか、外に飲みに行ったり、お客（高知では宴会のことをいう）があると夜遅く帰ったり、朝まで飲んだりということもありました。母はクリスチャンで、召された叔母と共に教会に通っていました。私は、小さいころから母に連れられて、教会やアメリカ人の女性宣教師の集会に行ったことが記憶として残っています。

小学校二年生の夏休みに、土佐山田町（現在の香美市）から南国市に引っ越しました。家のすぐ近くに教会があったので、日曜日には母や弟たちと教会学校に通うようになりました。何年生のころか忘れましたが、その教会学校のメッセージで、聖書のみことばによってイエス様を信じるきっかけをいただきました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

このみことばを初めて聞いたとき、ものすごいショックを受けました。当時の家庭状態を考えたとき、自分の家族にとっては奇跡のようなみことばと思いました。

私自身も、五年生のときに友人から「サッカーをやらないか」と誘われて、すぐ地元のサッカーチームに入りました。日曜日には練習や試合があったため教会に行く回数も減っていきました。中学、高校になるとサッカー中心の生活となり、ますます教会に行かなくなり、イエス様のことも忘れがちな生活になっていました。

高校三年生の夏休みになり、部活がひと段落ついてきたころ、母から聖書の集会があると、誘われました。このとき、何をいまさらという思いがありました。すでに高校二年のときに教会で滴礼を受け、自分はクリスチャンだと思っていましたし、大学進学のために勉強を始めていたからです。しかし母と共に、当時通っていた教会の牧師も一緒に、車で三十～四十分行ったところにあるバイブルキャンプの会場に行きました。そこにはベック兄をはじめ東京から来られた兄弟姉妹が大勢集まっていました。その夜の集会でのメッセージはそれまで聞いたことのないような内容でしたし、また喜びにあふれる兄弟姉妹の顔を見ると何か教会とは違うと感じました。

大学は、親の勧めで看護師になるために、浜松にあるミッション系の短大に三年間通いました。その間に高知にいる母は教会を離れ、土佐山田キリスト集会に導かれました。私は、浜松にある教会に通っていましたが、ゴールデンウィークや夏休みになると軽井沢のバイブルキャンプに集いました。

三年生になると、就職を決めなければなりませんが、国家試験の二か月前に就職が決まりました。現在働いている病院です。今思えばとても不思議でした。

就職雑誌を読んでいて何気なしに病院に面接希望のはがきを出しました。面接のために出かけたところ、事務の人が「重田先生のお知り合いですか」と尋ねてきました。私は何気なく返事をしました。就職が決まった後で改めて聞いてみると、その病院の大学に重田兄弟が働いておられたことがわかり、これも主の導きであった、と実感しました。

就職して吉祥寺キリスト集会に通うこととなりました。その頃は、イエス様によって罪が贖われ、赦されているという確信がない状態でした。しかしある夜、何かをしたというわけではなかったのですが、急にイエス様は私自身のために身代わりとなって十字架にかかって罪を赦してくださった、自分の罪はもう赦されているという確信が与えられました。そして高知のバイブルキャンプで、洗礼の証しにあずかることができました。

父も、母や妹たちが集会に集い喜んでいる姿を見るうちに、かたくなな態度が少しずつ柔らかくなりました。集会に集うようになり、イエス様の救いを受ける恵みにあずかりました。奇跡と思われた聖書のみことばが実現しました。

それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。（使徒　16・34）

以前私は、自分の家族が一番不幸ではないか、と考えていました。しかしイエス様と出会い、救われて、愛する家族に変えられました。もちろんみな主にある兄弟姉妹です。人間的には嫌なこともありますが、そのようなときは、すべて主から出たこととして、委ねて御心を待つようにされています。

現在、家族は高知、大阪、三重、神奈川とさまざまな場所にいますが、それぞれの場所で主を崇め主にあって一つとされています。

ハレルヤ。私は心を尽くして主に感謝しよう。直ぐな人のつどいと集会において。主のみわざは偉大で、みわざを喜ぶすべての人々に尋ね求められる。（詩篇　111・1～2）

今、私は主にある姉妹の妻、薫と、二人の男の子が与えられ、町田集会に集っています。主から離れていると、それが苦痛となり、また平安がなくなっていることに気付かされ、自ら喜んで礼拝をする大切さをかみしめています。この先のことも何が起こるかわかりませんが、御心を求めて生活するだけです。

しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」

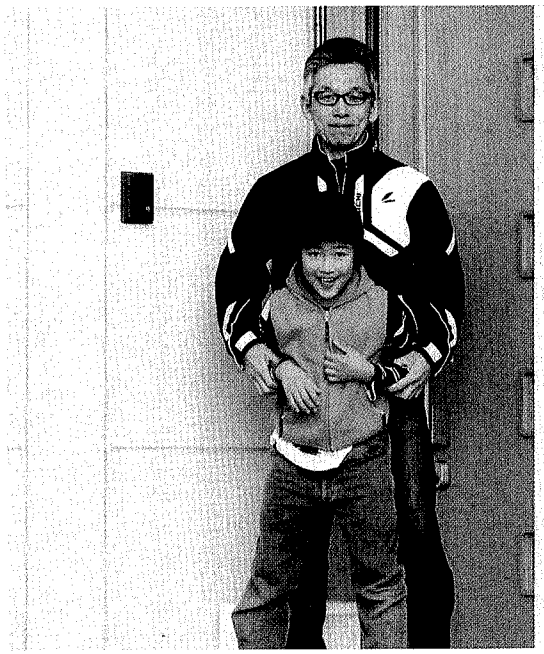
しかし、すべての人が福音に従ったのではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。」とイザヤは言っています。そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。（ローマ　10・14～17）

鍋島聖二
一九六四年　高知県生まれ
三和小、香長中、高知小津高、聖隷浜松衛生短大卒
東海大学付属大磯病院にて看護師として勤務
妻・薫、長男・将希、次男・喜満

12 人の証し Unser HERR lebt

みことばは道の光です

鍋島　恵二



お子さんの常喜（ときのぶ）さんと一緒に

私は一九六六年（昭和四十一年）六月九日に高知で生まれました。生まれたときからクリスチャンであった母に連れられ教会へ行っていました。母は信仰には厳格で、「クリスチャンたるもの×××でなければならない！」と言う人でした（今はかなりまるくなっています）。私はそんな母をパリサイ人と密（ひそ）かに呼んでいました。家はたいへん貧しく、夕食がインスタントラーメンという日もありましたから、中学生になってすぐ新聞配達を始め、大学を卒業するまで十年間新聞配達を続けました。

一九八九年、今の会社に就職し愛知県にやってきました。会社には、好きな飛行機の仕事ができてバイクに乗って、ごはんが食べられたらいいや、という軽い気持ちで入社しました。まさかこの会社で試練に会うとは思ってもいませんでした。

入社して、部品を加工するためのプログラムを作る部署に配属されましたが、一九九二年にバブルがはじけ仕事がなくなり、製造現場へと配置転換となりました。飛行機の仕事ができて、バイクに乗って、ごはんが食べられたので、別にいやでもなかったのですが、会社は私に辞めてほしかったようで、某重役から毎日いやがらせを受けるようになりました。それも日に四回も五回もケンカを売りにくるのです。社内で私を見かけるとまっ赤な顔をしてどなりちらし、最後に「どたわけがー！」と決めゼリフを叫び、のしのしと去って行く、そんな毎日が続きました（今ならりっぱなパワハラです）。私は毎日がつらく部屋に帰っては泣きながら祈っていました。イエス様なぜですか、私はどうすればいいのですかと。しかし与えられるみことばは、次のようなものばかりでした。

順境の日には喜び、逆境の日には反省せよ。これもあれも神のなさること。　（伝道者　7・14）

ああ、私は悲しい。この傷のために。この打ち傷はいやしがたい。そこで、私は言った。「まことに、これこそ私が、負わなければならない病だ。」

（エレミヤ　10・19）

まことに主はこう仰せられる。「あなたの傷はいやしにくく、あなたの打ち傷は痛んでいる。あなたの訴えを弁護する者もなく、はれものに薬をつけて、あなたをいやす者もいない。あなたの恋人はみな、あなたを忘れ、あなたを尋ねようともしない。わたしが、敵を打つようにあなたを打ち、ひどい懲らしめをしたからだ。あなたの咎が大きく、あなたの罪が重いために。なぜ、あなたは自分の傷のために叫ぶのか。あなたの痛みは直らないのか。あなたの咎が大きく、あなたの罪が重いため、わたしはこれらの事を、あなたにしたのだ。」

（エレミヤ　30・12〜15）

当時、私は若かったのでなんとか見返そうと必死に仕事をしましたが、私に対する評価は変わりませんでした。ある日同僚が、その重役が私のことを「あいつはまじめなふりをしているだけで何を考えているか分からない腹黒い人間のクズだ」と話しをしていたと、こっそり教えてくれました。何のことはない、たんにその重役の好みに合うか合わないかで私を見ていただけでした。

主の救いを黙って待つのは良い。人が、若い時に、くびきを負うのは良い。それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい。（哀歌　3・26〜28）

その頃から、私はいっさいの努力を止めて機械の陰に隠れて目立たないようにし始めました。日蔭者になってみると、たしかに日は当たらないけれど、嵐はやってこないしストレスもない。自分で自分の面倒を見るだけです。けっこう気楽でした。

一九九四年の年末にみことばが与えられました。

わたしの義は近い。わたしの救いはすでに出ている。（イザヤ　51・5）

どういうことかと思っていると、一九九五年の二月に名古屋集会の高島姉から敦子姉（当時は姉妹ではありませんでしたが）を紹介されました。そして二年ほどお付合いをして一九九七年七月二十八日に御代田で結婚式を挙げました。そしてそのすぐ後、九月に本社工場からもうひとつの工場へ転勤になりました。転勤先の工場でもなるべく目立たないようにしていました。上司はどうもそのことを分かっていて、黙って見てくれていたようでした。

二〇〇九年四月に、転勤してから長い間上司だった人が本社へ転勤になりました。そして、その一週間後、新しい上司に呼ばれ、行ってみると来週から本社へ転勤しろと言われました。本社のある部署の若い人たちの指導をしてほしいとのことでした。「私ももうそんな年か」と思いつつなぜかと聞いてみると、若い人たちが辞めたがっているので、温厚で忍耐強い人をと社長が言い、それならと前の上司が、忍耐強い者なら「鍋島」でしょうと言い、「じゃあ鍋島だ」となったというのです。楽しい日蔭ライフの終わった瞬間でした。

本社に転勤してビックリしました。その部署は、入社して一年二か月が一人、八か月が二人、三か月が一人で、素人の集団でした。お先まっくらでした。しかもあの重役がまだがんばっていました。唯一の救いは、前の上司がまた上司になったことです。上司がかなり私のことをかばってくれていたようです。

二〇一〇年三月に、あの重役が取締役を退任するという発表が突然ありました。しばらくして、品証部長が私の所にやってきて「君はよくやっている。これからもがんばってくれ」と励ましてくれました。品証部長は大手重工業から出向している人で、みんなからけむたがられている人です。ビックリしました。その後、生産技術の係長が「話しの分かる人にかわったので仕事がやりやすくなった」と言い出しました。前任の係長があるとき理不尽な命令をしてきました。「オレは係長でおまえは『平（ひら）』だ。『平』なら命令を聞け！」と。ところがそれを知った課長がそんな命令は無視していいと言ってくれました。

前に書いたエレミヤ書30章12〜15節の続きです。

しかし、あなたを食う者はみな、かえって食われ、あなたの敵はみな、とりことなって行き、あなたから略奪した者は、略奪され、あなたをかすめ奪った者は、わたしがみな獲物として与える。わたしがあなたの傷を直し、あなたの打ち傷をいやすからだ。（エレミヤ　30・16〜17）

二〇一三年現在、私のいる部署は、私が配属した頃より二倍近い実績を上げるまで成長しました。

母のことですが、聖書を読んでいて気がついたのですが、イエス様の行かれる所には、大体、どこにもパリサイ人もいます。イエス様は彼らと食事を共にすることもあります。普通きらいな人について行ったり、食事をしたりしないものです。もしかしてパリサイ人の中にイエス様を信じている少数の人たちがいたのではないでしょうか。そして母もイエス様のそばにいつもいたいと願うパリサイ人の一人だったのかなと思って、一人楽しんでいます。

試練に耐える人は幸いです。（ヤコブ　1・12）

鍋島恵二
一九九六年六月九日　高知県生まれ
南国市立後免野田小、鴬ヶ池中、県立高知東工業高、日本文理大
伊藤鉄工(株)勤務

肉の自分には何もない

鍋島　悟



前列左より次男の晶さん、伯母の公代さん、祖母の美恵子さん、長男の広海さん、悟さん、後列が妻の直子さん

私は物心のつかない赤ちゃんのときから母に連れられて教会に行っていましたが、中学生になってキリスト集会に集うようになり、喜びもあって洗礼を受けました。しかし罪がわからず、罪の赦しを体験することのなかった歩みは、自分だけでなく、兄弟姉妹をも苦しめた歩みでした。

五人兄弟の三番目に生まれた私は、あまえと、わがまま、こだわりも強く、良いと悪いが極端で、しかも勉強が大嫌いでした。当然ながら落ちこぼれてしまい、主の前に罪のパン種がどんどん大きく膨らみ、大勢の方にいやな苦しい思いをさせてしまっていました。主を知りながら、主を知らない人となんら変わるところのない、みことばを第一としない歩みでした。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者とし

て今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

（エペソ　2・1～3）

このみことばのとおり、私の歩みは自分の罪によって悩みの中で苦しむ歩みでしかなく、自分勝手な解釈でみことばにつまずき、イエス様から離れようと思ったこともありました。しかし、小さいころからみことばを聞いていたせいか、イエス様から離れる決心だけはどうしてもつきませんでした。そんな中で、家内と婚約する前に私の取ろうとした態度を主は見逃さず、悩みの中で苦しむことになり、どうにもこうにもならなくなって、ある兄弟姉妹に相談しました。ところが返ってきた答えはきびしいもので、私の罪をみことばをもって示してくださり、このとき初めて「苦しくても主に従いたい」と思わされたのでした。それからは主の前に静まり、悔い改めと祈りの日々が続き、一九九九年三月、御代田の福音センターで結婚に導かれました。

ところが結婚から五か月ほどで、家内に「うつ」の症状が出始め、日に日に精神的に不安定になり、八月下旬には仕事にも行けなくなりました。勤め先との連絡もできなくなり、私が連絡や勤め先に出向いて休職の手続きをしましたが、「なぜ」と思う余裕などなく、「死にたい」と毎日のように泣き叫ぶ家内を抱きしめてイエス様に祈る毎日でした。仕事も休めない状況でしたので、「どのような状況になっても受け入れられる信仰を与えてください」と祈るしかありませんでした。

家内の休職には精神科医の診断書が必要で、休職以後も精神科に通院していましたので、その状況から薬の服用を進められることは容易に予測できました。通院の前日、私は家内に、「薬はいつでも飲もうと思えば飲めるから、飲み始めるのはもう少し先にしよう」と言いました。その数日後、長男「広海」を妊娠していることがわかりました。薬を飲まないようにという思いを与えてくださったイエス様のご計画に、驚きと喜び、そして感謝でした。それでも家内の状況は良くなるわけではなく、私自身も精神的・肉体的に疲れはてていました。ときを同じくして私の勤め先の資金繰りも月日を追うごとに悪くなっていきました。そんな状況で私たちはある日、気づかされました。

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』」

（マタイ　19・4～5）

主は夫婦を一心同体にされたにもかかわらず、主に祈っていなかったことに気づかされ、祈るように引き戻していただいたのです。

勤め先の眼鏡店は、どうしても新しい店舗を出店しないといけなくなって、私が責任者に選ばれ、ますます忙しくなりました。急きょ引っ越しも必要になり、仕事の休みが取れない中で家内は臨月を迎えたものの、私は出産に立会える状況になく、一日一日祈るしかありませんでした。

新しい店舗の工事を五月の連休中にすることになり、朝から終電まで工事に立会っていました。そんなある日の明け方、予定日より早く家内が破水し病院に入院したものの、私は付き添えず店舗の工事に立ち会っていたところに、病院の先生から電話があり「急いで病院に来てください、ご主人の同意がなければ手術ができません。何分後に到着できそうですか?」と言われました。へその尾が赤ちゃんに巻き付いて出てこれず、ときどき心音も弱くなっているということでしたが、うまく電車に乗り継ぐことができても病院

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。（エレミヤ　29・11～13）

帝王切開での出産でしたが、もしその日が通常業務で私が店舗の工事の立会いに出かけていなかったら、私は職場から離れられない状況だったのです。しかも連休中にもかかわらず病院までの道も不思議なくらい守られて、主の恵みを味わい知る体験をしました。

出産後、家内の「うつ」は落ち着いたかのように見えても、発作的なパニックを繰り返しました。休みらしい休みが取れない状況にあった私は、余裕がなく、かまでは一時間半はかかる距離です。

祈ってから工務店の担当者の方に事情を伝えたところ、こころよく送り出していただき、タクシーに飛び乗りました。ところがそのタクシーは今では当たり前のカーナビを付けておらず、運転手さんも病院までの土地勘がなかったので、途中までという条件で発車しました。しかも、その運転手さんに「高速道路はひどく渋滞していたよ」と言われました。まるでドラマによくあるワンシーンのようだ思うと、そのような状況であったにもかかわらず笑いがこみあげてきて、タクシーの中で笑うのを必死にこらえていたのを覚えています。でも、渋滞していたはずの高速道路はがらがらで、一時間後には病院に着いていました。陣痛の痛みに苦しんでいる家内と一緒に祈り、その後、帝王切開により広海が生まれました。後で振り返ると、すべてが主のご計画とあわれみでした。

えって家内のパニックを引き起こすような言動もあって、お互い疲れはてていました。そのときは、やはり夫婦で祈っていなかったのです。

主はいつも私たちの祈りを待ってくださっていることを、再三、気づかせていただいていた私たちは、夫婦の祈りを再開しました。そんなある日、今まで何度も読み、聞いていたみことばが心に深く突き刺さりました。

彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮にはいり、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。そして、彼らに教えて言われた。「『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしたのです。」（マルコ　11・15～17）

私は、自分自身を毎日強盗の巣にしていたことに気づかされただけでなく、イエス様は私の中に入ってきてくださり、心の闇を全部ひっくり返して、命の妨げとなる物を倒し、追い出して、主なるイエス様との交わりの場へと導いてくださり、罪の赦しと、主に愛されていることを心から体験させてくださったのです。

私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。（1コリント　11・32）

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。（2コリント　8・9）

次男も与えられ、その後も夫婦の問題や子育て、仕事、健康などさまざまな試練がありましたが、すべてはイエス様の御手の中にあり、イエス様に目を向けるように導かれ、夫婦の祈りは不思議なくらい聞かれているのです。

もちろん肉的には不本意な答えもたくさんあって、自分の罪の貧しさに落ち込みますが、後になって、その答えこそが将来に希望と平安をもたらす答えだったと明らかにしてくださり、そのたびに「自分には何もない」ことを示されています。罪しかない自分だからこそ、そして、主の前には何もない自分だからこそ、主に祈り、主により頼むことに導かれています。

この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、彼らはすべての苦しみから救われた。主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。（詩篇　34・6〜9）

私たち夫婦の願いは、家族で主を賛美することです。

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。（詩篇　16・11）

鍋島　悟（なべしま　さとる）
一九六九年生まれ　高知県出身
日本眼鏡技術専門学校卒業　西村眼鏡店勤務
妻・直子（なおこ）　長男・広海（ひろみ）
次男・晶（あきら）

イエス様が私を変えてくださいました

上田　日出海



妻の弘美さんと

私は広島県呉市に生まれ、熱心な仏教徒の家庭で育てられました。

先の大戦で父は、私が八歳の時にボルネオ島に近いベルハラ海峡で戦死し、私は母と朝夕に仏壇にお経を上げる日々でした。母は年老いて癌で亡くなるまで、原爆の被爆者健康手帳を大切に持っていました。

私と妻は大学で知り合い、卒業してすぐに結婚し、私は機械メーカーに、妻は東京都教育委員会に勤務しました。

イエス様との出会い

大学卒業の時に、キリスト者の教授が「狭き門よりはいれ」のことばを贈ってくださいました。教授は、私の父が戦死したことを知り、「私が上田君の父親代わりになろう」と言ってくださいました。会社では激しい企業競争の中で生き残るために、社員の意識改革、労使関係の改善、経営体質の改革などに携わり、家庭を

顧みることはほとんどありませんでした。

五十七歳の時に人生の転機が訪れました。社員には改革を迫りながら、自分は人の心の痛みに鈍く、成功体験の中で傲(ごう)慢になっていることに気づかされたのです。また、自己中心で短気な性格のままでは、老後を妻と心豊かに暮らすことができないのではないか、無意味な人生を送ることになるのではないか、と不安を感じるようにもなっていました。私は改革すべきは自分自身であり、自分を変えなければならないと痛感しました。

そんな時に、書店で人生の本を探しながら、なんとなく聖書を手にとってページを開いていたら、「狭い門からはいりなさい」(マタイ 17・13)が目に入りました。そこで初めて、「狭き門よりはいれ」が聖書のことばであることを、三十五年の空白を経て知り、聖書を購入しました。時を同じくして、私の生きざまを観ておられた同教授が私に、「君を求めている会社がある」と勧めてくださいました。

長年勤めた会社への思いを断ち切ってでも自分を変えたい、との思いが強く、何の迷いもなくすぐに転職しました。五十七歳の時でした。転職した会社では過去を断ち切ってスタートしようと心に決め、謙虚でありたい、短気は起こさないように努力しました。家庭でも短気を起こさない、自分中心にならない、怒らないように努めました。長い間、我慢して支えてくれた妻への罪滅ぼしに、希望通り海外旅行も続けました。新しい会社での自己改革は、努力により少しは改善したように見えましたが、根本は何も変わっていませんでした。

生まれ持った性質は努力と時間では変えられないことを体験しました。努力不足もありましたが、自分は変えられない、もはやこれまでとギブアップしました。

そのような状況の時に、同室の秘書の方がクリスチャンであることを、お姉さんの葬儀を通して知りました。それからは、神、イエス・キリスト、死、天国、祈り、罪、欲望、救い、愛など、たくさんのことについて尋ねました。その都度、これを読んでくださいと吉祥寺キリスト集会の本を勧めてくれました。しばらくして吉祥寺キリスト集会に誘われましたが、私はまったくその気がなかったので断りました。すると、いつもの優しさとは違い、美しく鋭い眼差しで、「それなら結構です」と言われてしまいました。その眼差しに圧倒される思いで、一度だけと言って、吉祥寺キリスト集会に来てみました。内心は何かを求めていました。

秘書の方(宮田姉妹)は、私がパソコンを叩いて壊す短気さや、日常の態度を見て、ご両親と共に私のために祈ってくださっていたことを後に知りました。それからは、時々、吉祥寺の礼拝に行き、宮田姉妹のご両親との交わりが続きました。初めて集会に行った半年後に、ベック兄との初めての交わりの中で、私は胸の内を吐露しました。そして、集会の帰りには受洗を決意しました。それから二十日後の二〇〇三年五月三日に受洗の恵みが与えられました。六十六歳の時でした。

イエス様に救われて

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

(マタイ 7・7〜8)

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

(マタイ 7・13〜14)

わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。（ヨハネ　10・9）

私は高齢になってイエス様の門を叩きました。狭い門に入ってからは、自分で自分を変えようとの思いこそが傲慢であり罪である、と聖書のみことばを通して教えられました。また、短気と激しい性格は悪への道であるとも教えられました。このような罪深く愚かな私のために、イエス様は十字架上で血を流して私の罪を贖ってくださいました。

イエス様は私を傲慢と自我の罪から解放してくださり、私を滅びの穴から、お救いくださり、正しい道に導いてくださいました。今は、イエス様を恐れ、イエス様に従って歩む人生の目標が与えられ、イエス様が私を変えてくださいましたことを心から感謝しています。私は救われた後も罪を犯す愚かな者です。これからの人生をすべてイエス様にお委ねできますように、お導きくださいと祈る日々です。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・8）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（2コリント　5・17）

妻の救い

妻は、私が受洗すると言った時には突然のことで驚いたようでしたが、御代田の洗礼式に立ち会ってくれました。妻はベック兄にご挨拶した後にお交わりが与えられ、イエス様のお話しを初めてお聞きして喜んでいました。

吉祥寺の日曜礼拝、家庭集会には一緒に集い、聖書

が分からないと言いながら、ページを追う日々が続いていました。私は、妻の受洗はイエス様に委ねていましたので、一度も勧めたことはありません。私が受洗に導かれて約二年半たった頃でした、妻は家庭集会でベック兄とお交わりをさせていただいた後に、「洗礼を受けることにしました」と言いました。私は嬉しく、イエス様のお導きに心から感謝しました。

妻はドイツ喜びの集いのフイリンゲンで、二〇〇五年十月二十一日に受洗の恵みが与えられました。六十六歳の時でした。二人で聖書を読み、お祈りし、感謝と悔い改めの新しい信仰生活が始まりました。

あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。（マタイ　18・19〜20）

試練が与えられて

私は地方の誘致工場設立の仕事を終え、四年半の単身生活から東京に帰ってきて、三十八歳の時に、左手、左足の片麻痺を発症しました。左手の痛みと握力低下、左足の歩行に支障、首の頸椎の痛みについての検査結果は難病の後縦靭帯骨化症と診断され、手術を勧められました。しかし、まだ通常に働くことも生活することもできるので、手術による後遺症が恐ろしく、検査入院の前日に中止しました。

それ以降、生活態度を改め、食事も改善し、毎朝の入浴とマッサージ治療によって、病状の進行を遅らせる努力を続けています。イエス様に救われてからは、後縦靭帯骨化症は試練と受け止めて、イエス様に委ね、祈りの中で、一日一日を感謝して過ごしています。

私と妻が信仰生活に導かれて間もなく、妻の心臓弁膜症が悪化し、病を通して試練が与えられました。心不全で緊急入院、脳こうそくで再び緊急入院、さ

らに菌が血液に入り、意識不明で緊急入院――と続きました。緊急入院の時はいつもイエス様が傍におられ助けてくださったと思いました。七十一歳の時に心臓弁膜症の手術と心臓ペースメーカー手術。頻脈性不整脈を根治する手術も二回受けました。心臓病が癒されるまでには手術から三年かかりました。イエス様を信じ、すべてを委ねて、二人で祈る日々が続きました。

この間、多くの兄弟、姉妹のお祈りに支えられたことを感謝しています。そして、妻がイエス様の御手の中で生かされ、愛され、イエス様がすべてをご支配してくださったことを確信しました。

イエス様は私と妻に、病の試練を通して、信仰を強めてくださり、喜びと、平安を与えてくださいました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

（ヤコブ　1・12）

老後の日々

家庭では妻と毎日聖書を読み、お祈りし、イエス様に心が整えられて、新しい一日が始まり、夕には一日の感謝をイエス様にお祈りします。毎日イエス様とお交わりができることは喜びであり、幸せを感じます。

困った時にも、悩みがある時にも、自分では何も解決できません。しかし、二人は祈ることと、感謝することができます。

日曜日には、イエス様を礼拝し、みことばを聞き、敬愛する兄弟姉妹とお交わりし、祈り会でお祈りし、

恵みと喜びで満たされます。家庭集会に参加して、イエス様に導かれている喜びと幸せを実感しています。いつも、妻と共に行動できる恵みを感謝しています。イエス様に救われて、平安が与えられ、喜びながら、希望を持って生かされている日々を心から感謝致します。

主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。

（詩篇　37・4～5）

神のご計画

私に「狭き門よりはいれ」のみことばを贈ってくださいました教授は二〇一三年六月に天に召されました。ご葬儀と母校で行われた偲ぶ会で、私はローマ人への手紙5章を拝読し、お祈りを致しました。振り返って、「狭き門よりはいれ」のみことばに導かれて今があることを思う時、主のご計画に心から感謝致します。

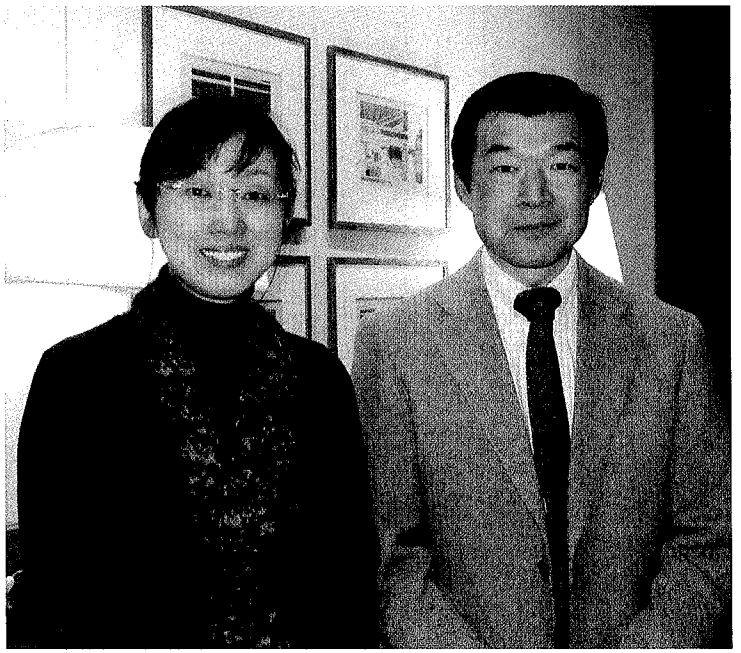
わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

上田　日出海（うえだ　ひでみ）
一九三六年　広島市呉市に生まれる
明治大学政経学部卒、ＪＵＫＩ（株）取締役退任、モーターマガジン社（株）常務取締役退任
妻・弘美（ひろみ）

主にあって喜ぼう

岩本　秀造



妻の範子さんと

私は一九五九年一月一日、東京都北区赤羽に生まれました。聖書に書き残したメモ書きには、「救い。一九八八年八月二十九日、二十二時五十二分」とあります。その聖書の箇所は次の一節です。

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

（ヘブル　11・3）

元旦生まれのおめでたい性格のままに学生時代までを過ごしましたが、何の準備も、素養も、能力もないままに「世知辛い」サラリーマン生活に突入し、厳しい会社生活を続けてまいりました。救われる前は、外面的には平静を装っていましたがいつも不安で、心のよりどころを得ようとしていました。歴史や哲学、文学、評論、音楽などに自分の心を満たす真理があるのでは、と手当たりしだいに探し求めましたが、深く理解することもなく、別のものに目移りすることを繰り返しました。

近くにあった教会で、荘厳なパイプオルガンの音が響き渡る閑散とした静けさの中に身を置くこともありました。心の平安にたどりつけるかもしれないと淡い期待をもっていましたが、喜びが得られることはなく、教会へも足が向かなくなりました。

そのころ、心を通い合える方との結婚の導きを祈っていました。この時、学生時代の恩師と集会の姉妹を通して、範子姉妹を紹介いただきました。初めて会った時、結婚の導きを静かに確信しました。この出会いがきっかけとなり、キリスト集会に集い始めました。それまで、教会とは静寂の中で牧師の説教を拝聴するところであると理解していました。しかし、集会の礼拝、家庭集会に集う大勢の人々に、またイエス様を真剣に求める交わりに新鮮さを感じました。あたかも幼少時代にタイムスリップしたかのように、大きな口を開けて元気よく聖歌を歌う姿にも圧倒されました。

こうした中で多くの兄弟姉妹との個人的な交わりが与えられ、これらの方々が、イエス様に救われた体験を正直に話されることに気づきました。それまで私は、「キリスト教」の信者になることとイエス様の救いを信じ受け入れることとはまったく違うことを知らなかったのです。また、集会の兄弟姉妹との交わりを通して、平安は人からではなく、御霊すなわちイエス様から与えられることを知りました。集会でのさまざまな体験と同時に、確信に至らない私自身がしだいに浮き彫りにされていきました。範子姉との結婚の導きを確信しながらも、人間的な思いであれこれ動こうと、自分の心の中でもがいている姿も示されました。

このようなある日の夜、バッハのリュートという楽器の静かな音楽を寝床で聴いていた時、なぜか感極まって、涙が止まらなくなりました。今から思えば次のような幾つかの思いが相まって一気にこみあげたものでした。

それは、信仰よりも結婚を優先しようと一生懸命になっている自分に愛想が尽いたこと。信仰を土台としたいと思いながらもこの世も大事としている中途半端さを思い知ったこと。みことばを尋ねたいと思いながらも自分の思いを優先しようとしていること。また、このころ、幼少時に癌を患ったことが原因で、「子どもが与えられる可能性がほぼない」と病院の検査結果で知ったこと、などでした。これらの思いと重なり、イエス様が私の罪の身代わりとなって十字架上で死んでくださったことが何ともいとおしく思われました。

翌朝は経験したことがないほど平安でした。嵐の後のようなすがすがしさがありました。私の救いの時でした。こうして、私はそれまで追い求め続けていた本物、イエス様と出会いました。

結婚の話を前に進めることをやめ、主のみこころは何かを祈る時が与えられました。主との深い交わりの体験でした。この後、一九八九年五月、受洗いたしました。

このころ、多くのみことばから、励ましと新たな力を頂きました。そして、範子姉にあらためて結婚を申し込む確信が与えられました。それを受け入れてくれた範子姉と一九八九年十二月に結婚いたしました。結婚の時に与えられたみことばは次のものです。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（2コリント　12・9）

仕事は日々、祈りなしにはやれませんでした。長時間残業の日々が数年前まで続きました。ある時期、仕事に神経をすり減らした状態が続き、それがピークに達して一週間ほど会社を休みました。厳しい会社の規律と人間関係との狭間で心を痛めました。このような状

況の中で、みことばは励ましと力であり、心の深いところでの平安は揺るがないことを実感いたしました。自分の能力や力量がいかに取るに足りないものかを思い知らされ、謙遜を学ばされています。

仕事を通して心を痛めた方々が実に多いことを知ることにもなりました。一方で、救いの道とは正反対の方向へ歩んでいて、その先には永遠の死がある多くの同僚に心の痛みを感じています。しかし、心の中でいくら叫んでも言葉が通じません。「そっちは死にいたる深い淵ですよ！」と必死に呼び止めたいとの思いは届かず、いかに自分が無力であるかを知らされています。祈りだけが私に与えられた唯一のよりどころです。

会社にも感慨深いものがあります。人間の作ったものはやがて壊されます。立ちあげられた事業が、時間と労力をかけながらも時代の流れに逆らえず、撤退をすることに携わることを何度か経験しました。この時、事業をどう収束するかは、どう始めるかにもまして多くの忍耐と労力が必要であることを経験しました。このことは、人生にも通ずるものがあるように思います。

私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。　（伝道者　2・11）

日々の仕事や生活のことであれこれと思いわずらってしまいがちですが、その都度与えられるみことば、礼拝、家庭集会での兄弟姉妹とのお交わりによってどうにか支えられています。

私の両親と範子姉の両親が相次いで召天しました。二〇〇四年、父、吉造。二〇〇五年、範子姉の父、弘巳兄弟。二〇一〇年、母、喜代子。二〇一二年、範子姉の母、みよ姉妹です。両親の召天は人生の大きな節目を感じさせるものでした。以前にも増して仕事について空しさ

を覚えました。日々の生活の中でこれほどがんじがらめにされ、心を痛めてまで全精力を費やさざるを得ないことが果たして主のみこころなのだろうかと祈らされました。けれども、自分の思いで事を決めることには平安がなく、主の導きにのみ従いたいという思いに導かれたことは感謝です。

私の父は昭和二年生まれでした。十代で特攻隊を志願し、戦友が一人ひとり出撃していく中、自分の順番を待ちながら訓練の最中に終戦を迎えました。父はこの時、本当に国のために死を覚悟していました。

戦後はこの反動からか挫折の連続でした。もはや地上で信じられるものは何もなく、まさに、神も仏もないという様子でした。また、偽善や見せかけと思えるたぐいのものについては、強烈な嫌悪感を示していました。家族のきずなと思いやりだけが父の望みでした。父は、私たちの結婚を通して集会を知り、心に何か思うところがあるようでした。特に、賛美と、聖書に基づいて行われる葬儀に惹かれていました。父は私たちの信仰を認めてくれただけでなく、私たちの思いを理解しようと努め、私たちと食事する時には、祈りに参加してくれたことは大きな恵みでした。信仰を公にすることはなく、集会に集うこともありませんでしたが、早々と私に自分の葬儀を託し、賛美を歌って欲しいと申しておりました。父は七十七歳の時、死に至る病が与えられました。召天の数日前、ベック兄の祈りに、大きな声ではっきりと「アーメン」と病床で応えました。多くの兄弟姉妹の祈りの中で父は天国へ凱旋していきました。

本物を求めた父の純粋な思いは、祈りにならない祈りとして私に受け継がれました。私にも本物を求める思いが与えられ、父も共にイエス様に出会わせていただいたことを感謝しています。私には三人の姉とその家族がおります。家族の救いがイエス様の約束であることは、あわれみであり、感謝せざるをえません。創世記45章1節から7節にあるとおりです。

神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。（創世記　45・7）

こうした「時」が来ることを信じて疑わず、忍耐を持って待ち続けています。また、親族の一人ひとりが、人知れず試練に会いながら地上を離れようとしていることを思うと、主が必ずや慰めと平安を与えてくださることを確信しています。また、友人や知人も、そのほとんどが私の家族同様この世の様々な「しがらみ」に縛られ、救いを知らない方々です。こうした方々の救いを祈り続けたいと思います。

私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。（エペソ　6・20）

主は、あわれみによって、たましいの救いを得させてくださいました。しかし私は、相変わらず自分勝手な思い込みと高ぶりの連続であり、また試練のたびにイエス様に見放されたとの自己憐憫に襲われます。私の小さな信仰の種はいばらの中に消え、実りがないようにも思います。けれども、次のような確信が与えられています。たとえ、自分の信仰など無きに等しくても、祈っても、目に見える結果を得ることに失敗し続けても、人に良く思われたり、もてはやされることでなく、人々からどのような判断をくだされ、時に誤解されたとしても、大切なことは、人前であろうが、なかろうが、みことばを愛し、救っていただいたイエス様の前で低くなり、ひっそりと、与えられている恵みと将来への希望を感謝し、幸いな隠れ家である「主のみこころ」の内を歩めればと思います。そして、「主のみこころ」について思わされていることがあります。空を見上げると雲があります。雲は、その時々に、様々なかたちをしています。時に高く、時に低く、時にゆっくりと、時に速

く、雄大に、絶え間なくある方向に向かって動いています。かつて、モーセが民と共に見上げたように、こうした雲を見上げるにつけ、御霊の導きを思わされています。

イスラエル人は、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。雲が上らないと、上る日まで、旅立たなかった。イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は主の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである。

（出エジプト　40・36〜38）

御霊は自分の小さな頭で思うはかりごとを遥かに超え、みこころの下にいつも私たちを置いてくだいます。「主にとって不可能はない」というみことばを確信し、御霊の導きをいただいて歩みたいと思っています。すぐに再臨が来るかも知れません。主の前に静まり、主が再び来られることを祈り求めて歩みたいと思っています。

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

（ヘブル　11・3）

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。

（ハバクク　3・17〜18）

岩本　秀造（いわもと　しゅうぞう）
一九五九年、東京都北区赤羽生まれ
練馬区大泉第一小学校、練馬区立八坂中学校、都立井草高校、中央大学商学部卒業、（株）日立製作所勤務
妻・範子

今知らず、後悟るべし

松見とみえ



左から娘婿のヤツェックさんと娘の晶子さん、とみえさんと夫の敬三さん
生まれたばかりのサムエルくんを囲んで

私は十九歳のとき、ベックさんにお会いして、主イエス様に出会いました。

学校のピアノの授業で、先生の代わりをするように言われたことから、友達から陰口を言われるようになり悩んでいました。妬んで裏切る友達が悪いと思い、そのうち進路を間違えたと思うようにもなり、学校を辞めることも考えていました。そのような中でクリスチャンという人たちだけは変わらないことに気がつきました。そんなある日、そのクリスチャンの方から伝道集会に誘われました。土曜日の午後、集会の教室に行ってみると、お話してくださったのはベックさんという若い外人さんでした。そのときベックさんは三十五歳でした。

お話は心に染み込むように入ってきました。そして不思議なことに友達が悪いと思ってきたけれど、私の中にも「弾ける」という思いあがりがあったことを知りました。ベックさんは、神様を無視することが罪だとおっしゃいました。それなら、私は立派な罪人だ、と

なたがたを友と呼びました。（ヨハネ　15・13～15）

裏切らない方がいるなら信じたいと思い、ベックさんの後についてお祈りしました。不思議な平安と喜びがありました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・9）

後で知ったのですが、クリスチャンの友人たちは、私が悩んでいることを知って私のために祈ってくださっていたのです。祈られたから救われたのだ、と感謝しました。

この十日後、ベック兄ご家族は一年半の予定でドイツに帰られました。横浜から船で帰途につかれた際、私は救われた喜びと感謝の手紙を手渡しました。ベック兄はこの手紙をドイツの集会で読まれ、「日本に戻ったとき、この子が集会にいるように祈って欲しい」と呼びかけてくださったそうです。一九九四年のドイツ喜びの集いで、初めてお会いしたシュベスターから、「とみえさん！」と名前を呼ばれたときは驚きました。「祈ってくださっていたのだ！」と実感しました。祈られていたからイエス様につながっていられたのだ、と感謝しました。

当時ベック兄はお一人で何役もなさっていました。メッセージ、お祈り、オルガンも弾いていました。「オルガンの弾ける姉妹を与えてください」と兄弟たちが祈っておられて、私がオルガンを弾くようになりました。

そのころ、お付き合いしている男性がいました。彼にも救われて欲しいと思い、集会に誘い、聖書の話をしましたが、「今は必要ない」と言いました。神様を必要としない人とは結婚できないし、このままお付き合いすることもできないと思いました。「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。・・・私たちは生ける神の宮なのです」（2コリント 6・14～16）

思ったことを覚えています。最後の賛美歌が涙で歌えなくて、ソッと他の教室に行くと、後からベックさんが入ってこられて、「どこに住んでいますか？明日の日曜日、吉祥寺に来ませんか？」と誘ってくださいました。

翌日、初めて吉祥寺集会に行きました。一九六六年六月のことです。普通の木造の家でした。十人あまりの小さな集会でした。個人的に交わっていただき、悩みを打ち明けました。すると、ベックさんは、「人間はそもそも裏切るような者だよ。しかし、決して裏切らない方がいる。その方はイエス・キリストで、あなたを友と呼んでいるよ」とヨハネの福音書のみことばを読んでくださいました。

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。・・・わたしはあのみことばに従って別れる決心をしました。これがみことばに従う初めての訓練でした。この三年後に松見敬三を紹介されて、主の導きで結婚しました。

一九九六年に、ある出来事がありました。私はすぐに「私のせいだ、私の罪のせいだ」と思わされました。「イエス様、私の罪を教えてください。気がついていない罪も教えてください」と祈りました。イエス様は祈りに答えてくださいました。次々と思い出させてくださり、すっかり忘れていたことも思い出させてくださいました。不思議なことでした。一つひとつをイエス様の前に悔い改めました。相手の方があるときは相手の方にも謝りました。そして、六ヶ月かかってやっと、私はダメな、どうしようもない者だと心の底から思わされ、「私はどうでもいいです！」と祈りました。すべてをイエス様にお委ねしました。イエス様を信じて三十年も経ってやっと明け渡すことができ、心の底からの解放を味わいました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。（詩篇 139・23〜24）

ちょうど十年前（二〇〇三年）に長女晶子が結婚したいと言い出しました。相手はヤツェックという名のポーランド人でカトリック信者、子どもが一人いる離婚経験者でした。「とんでもない！」と反対しました。カトリック教会は聖書だけに立つ教会ではないこと、聖書では、「救われていない人とのつり合わないくびきをいっしょにつけてはいけない」と書いてあること、マラキ書で「わたし（主）は離婚を憎む」と言っておられること、相手の女性が生きている間は解放されないことを話しました。

自分の計画を実行しようとする娘との毎日が戦いでした。「会ったこともない男性と結婚させるわけにいかない」と言ったら、彼は日本まで来てしまいました。彼にも反対の理由をはっきりと伝えました。「信仰の一致のない結婚はあり得ない」ことも話しました。それでも、みことばにも両親にも従おうとしない娘を、主人は追い出す決心をしてベック兄に伝えました。ところが、ベック兄は「追い出さなくていいよ。送り出してあげなさい。晶子は救われているよ。主の御手の中だよ」とおっしゃいました。そのとき、私たちには本当の意味が分かっていませんでしたが、従いました。そして、主の憐れみを祈るしかありませんでした。

ちょうどそのころ、ある兄弟がメッセージで「良い人にも悪い人にも恵みは与えられる。良いことをした人に与えられて、悪いことをした人に与えられないのは恵みではない、悪いことをした人にも与えられるから恵みなのです」とおっしゃいました。「晶子にも恵みは与えられる！」と信じて、真剣に恵みと憐れみを祈りました。娘を送り出す日、私たちはただ主に信頼し、主に晶子のすべてを明け渡すしかありませんでした。「主イエス様。晶子のすべてをお委ねします。晶子をあなたのいいようになさってください」と祈りました。すべてを主にお委ねして、飛行機が雲の中に消えるまで見送っていました。

彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。（ピレモン 15）

ワルシャワ空港に着いたとき、出迎えてくれた彼は別人のようだったそうです。目に涙をいっぱいためて、自分が救われたことを喜んで話したそうです。日本から戻ってからは、救いを求めて教会に通っていたそうですが、晶子の到着の十日前、主は彼を救ってくださいました。そして、救われた彼を通して、数ヶ月後に晶子の信仰も回復させられました。今までの罪を一つひとつ悔い改めました。

わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。（イザヤ 44・22）

主の深い愛を感じました。主に感謝しました。

主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。（イザヤ 55・7）

わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。（エレミヤ 31・34）

ヤツェックも晶子も、結婚について、みこころを求めて祈るように変えられていました。ポーランドに移って半年後、晶子はドイツのハイデ姉を訪ね、「主に従うことは、みことばに従うこと」と交わりを通して教えられ、日本に帰る決心をしました。ただ、ヤツェックの洗礼を祝福したいとポーランドに戻り、それから迷いだしたようです。主人は晶子にメールしました。「反対の根拠は

主のみことばにあります。日本に帰るべきであることとその理由を、ヤツェックにもお母さんにも静かに話して、たとい荷物を全部置いてでも日本に帰る決断をしてください。早くポーランドを離れてください。辛いかもしれませんが、自分の思いを捨てて、新しい歩みを始めてください」と。私たちは必死で祈りました。しかし二人は、「この結婚はみこころではないかも知れないけれど、許されていると思う」と、二〇〇四年九月十八日に市役所で結婚式をあげました。私たちは結婚式に出席することはできませんでした。

主人が会社を辞めた年、ポーランドに様子を見に行きました。ヤツェックは本当に生まれ変わっていました。晶子も変えられていました。近所の救われた若者たちは、豊かではないけれどもみんな本当にいい顔をしていました。貧しさの中でも喜んでいて、主にあるほんとうの豊かさを見せてもらいました。家庭集会も礼拝も共に集い、喜んで主を賛美し礼拝しました。

カトリック教会しかないオストロヴィエッツの町に主イエス様の教会を建てたいという夢は、ヤツェックが救われてからずーっと祈ってきたことでした。このことを以前から知っていたバイブルリーグポーランド支部のディレクターであるレシェックさんはヤツェックに、経験を積んだチャーチプランター（宣教師）のもとでの二年間の学びと実際的な訓練を受けてチャーチプランターになることを勧めました。ヤツェックは、六年間祈ってきたことでしたから、主イエス様からこれを受け取り、確信もいただきました。迷い悩んでいた晶子にも主は「私たちは神様に遣わされた者です。私たちにはなすべき仕事があります。行って、それをしなさい」と語ってくださいました。二人の訓練が始まりました。

二〇一三年のお正月に二人は、ヨナタンという日本語の生徒をつれて帰国し、五週間滞在しました。日曜礼拝、火曜日の学び会、家庭集会、葬儀とたくさんの集会に出席し、たくさんのお交わりをいただきました。御霊

は一つということを強く感じて、喜びに満たされてポーランドに帰って行きました。ポーランドに帰国後、バイブルリーグと、マザーチャーチであるサンドミエッシュ教会の方針が合わないからいっしょに働けないということで、バイブルリーグの支援が打ち切られました。吉祥寺の兄弟たちが働きながら伝道している姿を見て帰ったばかりでしたから、ヤツェックはすぐに仕事を探し始めました。ただ、二人は、自分たちには独立するほどの強い信仰がないと言っていました。

ヤツェックは、「ベック兄が昔、ドイツの国教会を離れて、イエス様だけに信頼して、聖書のみことばだけを大切にして、聖霊の導きで吉祥寺集会が祝福されてきたことが良く分かる。でも私たちにはベック兄姉のような信仰がないから独立なんてできない」と言っていました。ところがそのうちサンドミエッシュ教会とも合わなくなってきて、追い込まれていきました。教会から毎週礼拝に来るべきだと求められたヤツェックは、オストロヴィエッツで救われた方々と共に礼拝したいと祈ってきたのだから、それはできないと断り、ついに独立せざるを得なかったようです。

二〇一三年五月十九日、独立して初めてオストロヴィエッツでの礼拝がもたれました。八月十五日にはレシェックさんがメッセージをして、ヤツェックのママとヴァルデックさんがきれいな湖で洗礼を受けました。次の日曜日に、初めて聖餐式が行われました。吉祥寺集会と同じにしようと話し合って、一つの杯と一つのパンを裂いて行われました。

洗礼式の翌日、結婚して十年目にして晶子のお腹に赤ちゃんが与えられていることが分かりました。ヤツェックに仕事が与えられ、ヤツェックのママが洗礼を受け、集会が少し落ち着いた最善のときに、主は晶子の胎を開いてくださいました。大学病院の先生が「あなたが妊娠できたのはほとんど奇蹟です」とおっしゃったそうです。主が与えてくださったことを確信しました。卵巣嚢腫と子宮内膜症、それに子宮筋腫が三個もあるので、赤ちゃ



左から妻の敦子さん、長女の真梨子さん、二女の実祈子さん、道夫さん

生活の一コマから

小田 道夫

私は一九五七年に兵庫県で生まれ、明石で育ちました、大学は宮崎で、一人で下宿生活を送りました。宮崎大学を卒業後、関東に本社がある日産自動車に入社しました。

大学四年生のときに知り合った家内と、今で言う長距離恋愛をしていました。家内との結婚を望んでいましたので、上司に家内の実家に近い九州工場に行かせてほしいとお願いしたところ、九州工場で関東に戻りたがっている技術員がいるので、トレードしましょうということになり、九州工場に転勤となりました。この転勤はイエス様の長いご計画の一部であったと確信することができます。

九州工場に転勤した後、一九八五年に結婚しました。家内は情緒が不安定であるとは聞いていましたが、楽天的な私は結婚すれば大丈夫と思っていました。ところが結婚してみると、二週間の間隔で活発な「そう」の状態と、落ち込んで朝起きることができなくなる「う

んにとって良い環境ではありませんが順調に成長しています。主はそのこともご存知で授けてくださったのですから、無事に与えられることを信じて感謝しています。

「今知らず、後悟るべし」（ヨハネ 13・7）。私が一番苦しかったときに、水渡君子姉がくださったカードのみことばです。このみことばに支えられてきました。今、少し分からせてもらっています。

もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。（ヨハネ 11・40）

「あなたが神の栄光を見たいと信じるなら神の栄光を見ます。主に委ねて祈りましょう」とミンヘン姉が力強くおっしゃってお祈りしてくださいました。私にはそのような信仰はありませんでしたが、「神様の栄光を見たいです。信じたいです」と祈りました。今、主のご栄光を見させていただき心から感謝しています。主イエス様を心から賛美いたします。始まったばかりの小さな集会が主によって祝福され、オストロヴィエッツの町の人々が一人でも多く救われるようにお祈りしています。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。（1コリント 2・9）

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。（黙示録 22・20）

松見とみえ
福島県立白河女子高等学校、東京都立高等保母学院卒、カワイ音楽教室講師
夫・敬三、長女・晶子ソボチンスカ、長男・透、次男・光、次女・純子

つ」の状態を繰り返すようになりました。

翌年一九八六年に長女真梨子が生まれました。その後、福岡から横浜に転勤となり、家内がうつ病を通して横浜の教会に導かれました。少し遅れて私も教会の礼拝に集うようになりました。家内の「うつ」に対して私はまったく役に立たないことがわかり、イエス様にすべてお委ねしようと決心しました。肩の荷を降ろすことができ、とても楽になりました。キリスト集会へは二回目の福岡転勤のとき、一九九一年に導かれました。大牟田キャンプが、初めてキリスト集会に参加した集まりでした。

二十七年間、日産自動車に勤務しましたが、二〇〇六年十月に今の会社に転籍し、その翌月には家内を連れて米国ケンタッキー州の工場に赴任しました。二〇一三年五月末に電話連絡があって、七月一日付けで日本に帰任すること、そして帰国する前にフランスで一週間の教育を受けるようにと告げられました。帰国まで一ケ月ほどしかなかったのですが、引越しの大変さを一番良く知っている家内もパニックになることもなく、冷静に受け止めることができました。イエス様の憐れみでした。本社の指示どおりに六月八日から六月十五日までの一週間フランスに出張しました。

このフランスの一週間の出張のなかでの六月九日の夜のことです。ホテルでシャワーを浴び、歯磨きをしていたときに、舌の表面に異常があるのに気がつきました。洋服が引っかかったときに鉤(かぎ)型に破れることがありますが、そのような切れ目が舌の端の方にあったのです。触るとしこりのように固くなっていました。舌の裏を見ると、血管がひどく膨張していて大きな塊のようになっていました。何か悪性の腫瘍ではないのだろうかと不安になってしまいました。以前に会社の同僚二人が舌がんになり、そのうちの一人は舌の一部を切り取る手術で、手術後に言葉を明瞭に話すことができなくなり、苦労されていました。

そのようなことが思い出されて、眠れなくなりました。次の日からの仕事があるのに、ベッドに横になっていても、頭の中は不安な気持ちでいっぱいになりました。夜中の二時も過ぎたころ、いつも家で聞いている織田兄姉の賛美の歌が頭に浮かび、「賛美の歌を聴きたい」と思いました。持っていっていたＭＰ３を枕元に置き、賛美を聞きました。すると不思議に気持ちが安らいできたのです。それからというものフランス滞在中は、毎晩、寝るときに賛美の歌を聴いていました。そうすると、いつの間にか眠ることができたのでした。フランス出張の間、賛美は私にとって大きな慰めとなりました。また、毎週水曜日に持たれている北米の数人の姉妹方とのスカイプの祈り会でお祈りしていただいたことも本当に感謝でした。

ふだん私は家内と朝にウオッチマンニーの「荒野の食卓」を読んでいます。この出張のちょうど真ん中の六月十二日の「荒野の食卓」が私の心に入ってきました。次のように書かれていました。

六月十二日

私たちには五つのパンと二匹の魚のほか何もありません。私たちが出かけて行って、この民全体のために食物を買うのでしょうか。（ルカ　9・13）

「『あなたがたで、何か食べるものを上げなさい』とイエス様が言われたのは、弟子たちが何かを計画することをイエス様が期待されたからではなく、弟子たちに奇跡を期待してほしかったからでした。しかし弟子たちは、信仰や祈りの実践を必要としない安直な方法を選びました。弟子たちが考えた解決方法は、出かけて行って、買うことでした。それは無価値な提案でした。パリサイ人やサドカイ人でさえも同様な提案をしたことでしょう。そこには信仰が見られません。イエスへの信頼が見られません。ヨハネの福音書が明らか

にしているように、彼らはふところ具合だけを考えていたのです。私たちは、自分は何ができるかということだけを考え、神と、神の無尽蔵の富に対して目を閉ざしています。自分に何ができて、何ができないか、そんなことを気にしてはいけません。神は私たちに、ご自身の奇跡を示すことを待っておられるのです。」

これを読んだときに、私は次のみことばを思い出しました。

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

（ダニエル　3・16〜18）

そして、このように祈りました。「イエス様、あなたはご自身の奇跡を示すことを待っておられます。今回の出来事について私は奇跡を期待します。しかし、もし、そうでなくても私はあなたを賛美します」と。

また、アメリカへ帰国する前夜、パリ市内のホテルに宿泊しました。日曜日の電話礼拝に一緒に参加していた吉田信夫兄弟のことを思い出し、吉田兄弟に電話しました。吉田兄弟は恵姉妹の看病のために日本に帰国していましたが、ちょうど前の日にパリに戻っていたときで、すぐに連絡がとれ、出発日の朝にお交わりの時間が与えられました。

私はその週に経験させていただいたこと、信夫兄弟は恵姉妹の病気を通して与えられた慰めと憐れみについて、お互いの心境を証しする場となりました。公園で散歩をしながら、主からいただいた恵みに感謝しました。主にある兄弟とのお交わりは、言葉に言い表せない喜びに満たされたものとなりました。本当に感謝でした。このためにこそ、今回の出張を主が備えてくださったのだと思いました。

フランスからアメリカに帰国した後で、インターネットで日本の耳鼻咽喉科の病院を調べ、六月二十八日の診察の予約をしました。予約を取ってしまうと、舌のことは気にならなくなっていました。

日本への引っ越しの準備、各種手続き、家財の売却、処分などあわただしく時間があっという間に過ぎてゆきました。六年半のアメリカの駐在を終えて、予定どおり六月二十七日に帰国し、次の日に診察があるので、二週間ぶりに舌を鏡で見ました。すると、前にあった傷を見つけることができません。いくら探しても跡形もなく、きれいになくなっていたのです。次の日に、病院で診察を受け、舌の奥まで診てもらいましたがまったく異常はないということでした。舌の裏側のことも話しましたが、それも問題ないということでした。家に帰って家内と二人で主の憐れみに感謝しました。そのときに、私はまったく聖書のみことばのとおりだと思いました。

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。信仰の薄い人たち。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。（マタイ　6・27〜34）

私はいつも明日のことを心配しそうになるとき、「労苦はその日その日に、十分あります」というみことばを思い起こします。しかし、私は癒しを強調したいのではありません。私の言いたいのは、「もし、そうでなくても」というみことばです。自分にとってそれが自分の思うとおりでなかったとしても、平安でいられた、主に感謝することができた、ということです。悩みながら、喜ぶことができる。これこそが奇跡ではないかと思います。主イエス様にあって人はみな主の奇跡を体験することができると確信します。

小田　道夫（おだ　みちお）
一九五七年、兵庫県生まれ
兵庫県立明石北高等学校、宮崎大学機械工学科卒業
日産自動車（株）を経て、現在は（株）ヴァレオジャパンIVN事業所　クオリティ・ダイレクター
妻・敦子（あつこ）、長女・真梨子（まりこ）、次女・実祈子（みきこ）

神、その道は完全

神澤　毅



妻の圭子さんと

私の実家（群馬）は無宗教で、信仰心の薄い家でした。イエス様は二千年前、いや世界の基の造られる前から、救いのご計画をもって名を呼んでくださっていたことを覚え、イエス様の愛と憐れみに感謝しています。

救われるきっかけ

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

（ヨハネ　12・24）

私は、一九四〇年に東京湯島で生まれ、一九四四年に父の実家（群馬県高崎市）に疎開し、高校を卒業するまでその地で育ちました。

父は戦後も東京でサラリーマン生活を続け、週末に実家に帰り、月曜日の朝上京という生活を停年まで

続けました。私は四人兄弟姉妹の長男として、中学生のころから父の代理として、村のお役や冠婚葬祭に家の代表として駆り出されました。自我意識や独立心が強くなっていきました。両親は忙しく、子どもたちを自由奔放にしていたので、私はだれに相談することもなく生活し、進学も、仕事もまったく自分の好みに従って選択しました。自分の道は自分で決定し、自力で前進するという強い意志が培われました。

人は自分の行ないがことごとく純粋だと思う。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。

（箴言　16・2）

最初の仕事は、開局して二年目のテレビ局でした。はじめは正義感に燃えて働いていました。しかし、「社会の木鐸（ぼくたく）」、すなわち、世の人たちを覚醒し、世の中を正しい道に導く役目を担うべきマスコミの会社が金儲け主義に走り、仕事の下請け化、首切り、法律無視、権力との癒着などが増す中、正義感を抱いていた私は組合運動に傾きました。会社を、そして世の中を良くする一員になりたいと考えていました。

やがて、妻との結婚を通して、教育こそ世の中を変革する仕事であり、これからの日本の未来を切り拓く仕事であると確信するようになりました。働きながら教員免許を取得し、三十八歳のとき、東京都の小学校の教員に転職し、やっと希望の仕事に就くことができました。なんと自分は恵まれているんだと思いました。

さらに待望していた娘も与えられ、毎日が平安と希望に満ちた生活でした。

娘は、近所にある教会の日曜学校へ二年間通っていました。イエス様が大好きな子でした。近くの公園に行って天使と話をしてきた、と言っていました。一本の木や草花、昆虫やアリなどと会話し、感動していました。娘にとっては、それが至福の時だったようです。一方、人間の作ったものには興味がなく、お店や町は好きではありませんでした。娘は、学校はよく休みましたが、日曜日になると元気になり、教会へ行くのを楽しみにしていました。日曜の朝になると、早起きし、自分で料理をし、私たちが起きるのを待っていました。

私たちは、何度か牧師さんに誘われたのですが、宗教には関わりたくないと思い、逃げていました。ただ娘が元気で喜んでいるなら、それは嬉しいことだと思い、毎日曜日に教会へ車で送り迎えをしていました。

しかし、愛する娘（珠生・たまき）は九歳十か月（小学四年）で、突然ガンで天国へ召されました。自分で描いた人生設計は一瞬にして崩れてしまいました。

妻は、娘の葬儀の二週間後にキリスト集会の姉妹に連れられてベック兄に会い、「死んだ子は天国だから安心だよ。むしろ生きている子の方が心配だよ」と言われ、一瞬にして悲しみの涙が取られて、すっかり変えられました。妻は、二か月後に洗礼を受けることになり、立会いを頼まれて、初めて吉祥寺集会に行きました。

一方、私は酒やカラオケで苦しみを紛らわしていました。娘がやりたがっていた花屋や菓子屋をはじめようかとも思いましたが、心はますます重くなっていきました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

なぜ私たちにこのような悲しみ、苦しみが与えられたのだろうか、それを自問する日々が続きました。こんなとき、みことばが与えられました。

イエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯

したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9・1〜3）

一九八八年五月三日、娘の死より五か月後、四十六歳のとき、軽井沢のバイブルキャンプに妻と参加し、ベック兄と初めてお会いしてお交わりをいただきました。イエス様の十字架の死による罪の赦しとよみがえりによる永遠の命は、信じる者にはだれにでも与えられることをお聞きして、私はイエス様を信じる者となりました。五月二十二日、吉祥寺集会場で二十数名の方々と一緒に洗礼を受けました。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。（ヨハネ　13・7）

私は人の話を素直に聞く耳がなく、ひとりよがりで我が道を行く者であり、自分こそ正しいとしていました。これこそ、自分を神とする罪でした。この罪のためにイエス様が十字架にかかって罪の贖いをしてくださったことを知り、心より悔い改めることができました。わがままで罪深い私を憐れんで救い出してくださった、イエス様の愛と憐れみに深く感謝しました。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（2コリント　5・17）

このみことばを素直に受け取ることができ、悲しみ、苦しみも和らぎました。娘の死後、一年目に自宅で記念会がもたれ、その日以来、毎月家庭集会がもたれるようになり、二十六年目になりました。たとえ試練があっても、「ふたりで祈る」ことによって強い確信と希

望・喜び・奇蹟を体験し、苦しみや患難を乗り越えてくることができました。

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。（マタイ　18・3）

娘が遺した日曜学校のノートは、私たちに大事なことを教えてくれて、今の私の歩みの源となっています。その一部分を以下に記します。

（問）「人間と動物の違いはなんですか？」
（娘）「人間はお祈りができます」

私はイエス様を知る前は無神論者でしたから、徹底的に疑って納得できるものだけを信じるという姿勢でした。その自分の正しさや考えが空しくされて、祈ることの深さと真実を思わされました。

また、信仰の人ノアとその家族が村人から嘲（あざけ）られても、大きな舟を造っていたとき、

（問）「あなたがノアさんだったら、どうしますか？」
（娘）「『ただ、神様を信じてください』と叫びます」

と、書いてありました。人を恐れず、神を恐れ、信じている娘の心を想像して、今の私たちも再臨を前にして同じ叫びをあげたいと思わされています。

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。（マタイ　5・3）

（問）「貧しい心とは、どんな心ですか？」
（娘）「うれしい心です」

しかし、こんな弱い信仰なのに、以下に記すように、イエス様は憐れみと恵みと愛を注いでくださいました。

主の恵みについて

●一つ目

妻の実家（山形）は偶像の神に仕えた家でした。義母は末期ガンで危険な状態になっていたのですがそこから脱出し、反対に、見舞いに行った私たちの娘は一か月後に入院、そしてその一か月後に召され、超特急で私たちが救われました。こうして義母もイエス様を知って救われ、二年半後に召されました。残された義父の救いのため、お見舞いに帰省するたびに家庭礼拝をし、その都度、救われている義妹とその夫、実家の嫁や姪たち、義理の兄弟、息子たちの参加で、一人ひとりの中にイエス様が住んでくださるようになりました。しかし、山形の地には、礼拝も集会も交わりもありません。私たちの怠慢の罪を悔い改めています。

心が貧しい人は天国へ行けることを信じ、嬉しくなったのだと思います。

（問）「好きなみことばはなんですか？」
（娘）「詩篇100篇2節です」

喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。
（詩篇　100・2）

自我だけで生きてきた私にとって、娘が遺したノートは衝撃的であり、イエス様からの言葉として素直に受け取ることができました。

このようにして、夫婦は同時にイエス様を信じ、救われ、悲しみが癒され、解放されて歩んでいました。しかし、共働きの生活は、忙しさに明け暮れる毎日でした。礼拝やキャンプに行くだけの弱く、みじめで不従順な信仰そのものでした。

●二つ目

息子が主を信じる者となりました。息子が結婚したいと言ったとき、私たちは「主にある結婚でなかったら出席しない」と答えました。息子は真っ青になり「祈ってくれ」と言ったことから、毎日三人で祈るようになりました。それが息子とイエス様との出会いとなったことは、本当に感謝でした。

結婚に至るまでの戦いは二年間続きましたが、次のみことばをいただき、希望をもって祈っていました。

彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。
（ピレモン　15）

息子は結婚後、家族四人で家庭集会や礼拝に集うようになったことは感謝です。

●三つ目

私の父、萬吉の救いと葬儀です。

頑固な意志と考えで信念の人として百歳十か月の人生を生きた父が弱められ、イエス様と出会い、病院のベッドではイエス様の真実にだけしか耳を傾けなくなってきたときに、次のような言葉を残しました。

「神様を信じることは自分のためではあるが、伝えなくてはならない。命がけで伝える値打ちのある方なんだ」。「私の人生は大したことではなかった。万全じゃあなかった。もっとも、万全だったら神様（イエス様）はいらないもんな」。これは、死が近づき、しかもインフルエンザにかかっているとき口にした言葉です。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。
（1テモテ　2・5）

葬儀は、後継ぎ三男の意向で行われましたが、大勢の兄弟姉妹が駆けつけて祈ってくださり、その祈りに支えられて、私は強く立ち続けられました。葬儀は、イエス様の憐れみと導きによって、内容的にはイエス様が中心となり、隅々までご支配してくださいました。私は人を恐れつつも、父の救いの証し集を引き出物と一緒に配り、弔辞の枠を使って、お坊さんの頭越しにイエス様を葬儀で紹介することができました。まさに奇蹟でした。

父、萬吉は救いの証し集によって今もなおイエス様を伝えています。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。（詩篇　103・2）

神澤　毅（かんざわ　たけし）
一九四〇年　東京都生まれ
高崎市立岩平小・中学校卒、群馬県立高崎工高電気通信科卒、テレビ朝日入社、
中央大学法学部（二部）、明星大学卒、
八王子市立第五小学校赴任、町田市立つくし野小学校、町田市立鶴間小学校停年退職

イエス様を信じてください

神澤　圭子



左から圭子さん、孫の鈴音ちゃん、ベックさん、嫁の泰代さん、息子の哲郎さん

あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。（詩篇　8・3～4）

滅びに向かっていることも知らず自分勝手な生き方をしていた者に、イエス様は永遠の命を与えてくださり、人生の意味を与え、目的をもって生きるようにと導いてくださいました。

私は、神社を祭っている家に生まれ育ち、物心がつくころから両親（特に母親）と一緒に神社で手を合わせていました。しかし、聖さを求めることなど知ることなく、「人は何のために生きるのか」、「真実の神は存在しているのか」などの疑問や霊的渇きは持ちませんでした。自分の思いや考えを中心にして、私たちの家族は特別に守られているという傲慢な思いを持っていました。

山形の実家を出て横浜に赴任し、結婚しました。二

人の子どもが与えられ、忙しく疲労困憊の中にあっても子どもたちに励まされて歩んでいました。

長女珠生(たまき)には、生まれた瞬間から特別な感情が心からこみ上げ、「恋しくて恋しくて」毎日、目を細めて感動しておりました。そんなとき、まさかの事態に遭遇したのです。片時も私たちから離れることのないようなスキンシップの中にいた珠生が、突然「たった一人で」天に駆け昇っていってしまったのです。私は、珠生はどんなにか淋しく悲しい思いをしているのではないか、娘の十年足らずの人生に満足があったのだろうか、と思い煩うばかりでした。珠生は、何も言わないが何もかも悟っているような畏れすら感じさせる子でしたから、私の心の奥底まで見透かしているのではないかと思うと、つぎつぎと浮かんでくる私の身勝手さ、罪意識にさいなまれ、私は娘に「ごめんなさい」、「ごめんなさい」と泣いて許しを請うていました。そんな悲しみと絶望の中にあった我が家に、イエス様が戸を叩いてくれました。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(黙示録　3・20)

葬儀の二週間後、ベック宣教師にお会いし、お話を伺う機会をいただきました。ベック兄は笑顔で私の両手を強く握ってくださり、「よく来たね」と迎えてくださいました。お交わりの中で、心を揺さぶられたことが三つあります。

1天国があること。娘は生きている！一番幸せなところで神と共に。ベック兄の第一声は「天国に行った子は、もう安心」、「むしろ生きている子どもの方が心配」でした。

2生まれながらの人間には、神との間に罪というへだての壁があり、だれ一人自分の力では神の国(天国)には行けないと話されました。このことを聞いたとき、「では私はどうしたらいいの」、「もうダメなの」と不安にかられました。しかしベック兄は、イエス様が私たちの身代わりとなって十字架にかかって、へだての壁を取り除いてくださったから、私たちは神の国へ行くことができるようになったとおっしゃいました。このことを聞いて安心感が与えられ、不安から解放されました。

3ベック兄の私への祈りは、「私のわがままの罪、自己中心の罪を赦してください」でした。私は参ってしまいました。「どうして私の心の内がこんなに分かるのだろう」と思い、「その通りです」と認めました。わがままの罪を認識した初めての体験でした。それからの日々は悔い改めの連続となりました。

ベック兄の語られたすべてを信じられたことは主の憐れみであり、感謝でした。ベック兄との交わりを終えた帰りの車中で、私の心がぐんぐんと広がっていくのが実感されました。その晩、かすかに心に灯った希望の光の中で、イエス様が個人的に現われてくださり、確信を得させてくださいました。「私のために、イエス様がいてくださる」という確信は、罪の赦しと平安と救いの御声であり、イエス様の大きな愛に包まれたようでした。

天国という目的地(ゴール)があり、愛する者との再会を約束してくださっている方、悲しみの涙を一瞬にしてぬぐい去ってくださった方こそ、真実の神であると心に信じたとき、それまで何となく拝んできた神々が色あせてきました。そればかりでなく、「宗教」にからんでいる昔からの風習や言い伝え、形式からもすっかり解放されました。

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。

(ヨハネ　8・32)

一方的な憐れみと恵み

イエス様と出会って、天国を確信し、悲しみの涙をぬぐい去られた私に、主は、一方的に恵みをくださいました。

イエス様を信じるようになった初めのころは、娘が最

高の幸せを得ているのだから、私にとってもそれ以上に幸せなことはない、再会する日をがまんして待とうと思いました。しかし、恵みの数々のゆえに悲しみは日々に小さくなり、がまんが希望へと変わっていきました。

神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。

（1コリント　10・13〜14）

恵みの一つは、娘の分まで生きていくと頑張っていた夫が白旗を挙げ、三か月後に救われたことでした。二人で共に歩めるようになった最初の働きは、山形にいる私の母の救いのための祈りと伝道でした。娘が召され、その二週間後に救われた私は、末期ガンだった母への伝道を始めました。母のところへ行く車中で私は聖霊に満たされ、母にイエス様を伝えに行く喜びでいっぱいとなりました。娘が召されて悲しみの中にあるはずの私が母を慰めに来たことに、母が不思議と感謝をもって「あなたの神はスケールが違う」と言うのでした。私も「本当だな」と再確認をさせられ、励まされました。母は二年後に召されました。このようにして、「主は生きておられる」体験と聖霊の満たしと喜びを初めて味わいました。

大きな学び――二つの疑問からの解放――

私には二つの疑問がありました。その一つは、「聖書は人間が書いたものではないか」という疑問でした。

母の死を通して、あまりにも素晴らしい主のみわざと奇蹟がつぎつぎと起こされていく中、主のご臨在に、ただただ嬉しさでいっぱいでした。主のご栄光を証ししたくてたまらなくなり、「この目で、また霊の目で見た事実だけを書こう」と決心しました。喜びいっぱいの中で三日間、聖霊さまに導かれて「証し」を書き終えたとき、「聖書は、主なる神によって啓示され、霊の目で受け止めたことを確信して書かれた」という事実にハッと気づかされました。

二つ目の疑問は、社会問題に対する集会の姿勢でした。湾岸戦争（一回目）の中のある日、学校で同僚の先生に「かわいそうね。早く止めてくれないかしら。私、祈っちゃったわ」と不意打ちに言われ、驚いて「だれに？」と聞き返しました。その人は「イエス様よ」と確信に満ちて言いました。前に人間関係で悩んでいると聞かされたとき、私はその方にイエス様を伝えていたのですが、そのままになっていました。それどころか、この時の私には「信じていない人が祈っても聞きとげてもらえない」と高ぶる思いがありました。しかし、翌朝の新聞の一面記事は、大きな見出しで「湾岸戦争終結宣言」でした。私が、「あなたの祈りは聞きとげられたわよ」と興奮して言ったところ、「そうよ」と確信に満ちた返事が返ってきました。誠意をもって祈りに耳を傾け、聞きとげてくださるイエス様を覚えることができました。それまでの私は、どうして集会は戦争反対の意思表示をしないで、祈るだけなのだろうと疑問をもっていました。しかし、湾岸戦争を止めさせることもできるイエス様の「全能の力」と「祈りの力」を知りました。イエス様こそ、すべての問題解決の秘訣と思わされました。このことを通して、私の罪が示されました。非情さ、他人を見下す傲慢さ、不信仰の罪の数々を、恥じいる思いで悔い改めました。

罪の中で

救われてから二年間ぐらいは、イエス様が中心にいてくださる生活に平安と喜びがありました。聖霊に満たされ、導かれ、力を与えられて、母に伝道できる幸せもありました。しかししばらくすると、仕事にスイッチが入りました。私は「子どもたちが楽しんでくれること」、「音楽授業で幸せになってくれること」、「音楽が好き

になってくれること」を目指していました。音楽教師の土台は「愛」と「何倍もの努力」だと考えていました。教科書通りの教育は無味乾燥で生き生きとした喜びが出てきません。教育方法は自分で見つけるものと考え、それなりの成果もありました。ほかの教師からは白い目で見られることもありましたが、目指すところに向かって努力していました。しかし、仕事に喜びがあり充実すればするほど、「主から離れている」、「自我のかたまりになっている」、「主の前に罪を犯している」、「十字架への感謝が薄れ、主を悲しませている」など…の思いが湧いてきました。聖霊さまの導きではなく、自分の肉が支配し、自己満足に喜び、自分の栄光を求めて、生徒の前に立って、傲慢の道を突き進んでいる私がありました。私は、悩みと悔い改めの日々となりました。そんな葛藤と迷いの中、転勤の時期になりました。私は、イエス様の御前に静まり祈りました。「イエス様、私は仕事を辞めた方がよいですか。それとも、このまま新しい学校へ行ったらよいですか。どちらの道に行くべきですか」。祈ってから、聖書を開きました。みことばが飛び込んできました。

「集まれ。城壁のある町に行こう。」シオンのほうに旗を掲げよ。のがれよ。立ち止まるな。

（エレミヤ　4・5～6）

祈りのお答えだと直感しました。「城壁」や「シオン」はイエス様のところだと確信しました。しかし、私の感情と意思はみことばに従えませんでした。子どもたちの前に立つと、頭のてっぺんから足のつま先まで意欲と喜びが流れ出しました。私は、みことばを怖れました。そこで、「もう一度だけイエス様のみこころがはっきりわかるように示してください」と祈り、聖書を開きました。つぎのみことばが示されました。

自分から進んでエルサレムに住もうとする人々を

みな、祝福した。

（ネヘミヤ　11・2）

このみことばは、私の心を突き刺しました。言い逃れができないほどの致命的なものでした。私は、信頼する姉妹との電話の交わりに導かれました。姉妹は、私のすべての話を聞いてくださった後で、「あなたの仕事は、神様からご覧になったら、役に立たなかったのよ」とおっしゃいました。私は一瞬強いショックを受けましたが、すぐに「神様の役には立たなかった」ことを事実として受け入れることができました。さらに彼女は、「あなたには違う土俵があるのよ。今の仕事は土俵が違うのよ」と続けられました。その話を終わりまで聞かないうちに、「私、辞める！」と何のためらいも迷いもなく決心していました。それでも私は、願わくばという思いでダメ押しをしてみました。「三年たったら辞めますから、三年待ってください」というものでした。でもその姉妹からは、「イエス様は、あなたの使い古した捧げ物などいらないのよ。生きた命が欲しいのよ」という答えが返ってきました。私にとって、仕事は命となっていました。

自分と仕事をイエス様に明け渡す決心をした後は、心は爽快でした。翌日登校し、子どもたちに会っても、意欲も感動もなくなっていました。ただ祈りました。「これから卒業式までの連続する大きな音楽行事のすべてを精いっぱいできますように」と。イエス様は祈りを聞きとげてくださり、人の思いをはるかに超えた祝福を与えてくださいました。このときの平安と喜びは、娘を失った悲しみの中で涙をすっかりぬぐい去ってくださった平安と同じものでした。「辞める」と決心したときから、主の住まいの中に移されていたのです。

万軍の主。あなたのお住まいはなんと、慕わしいことでしょう。私のたましいは、主の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。

なんと幸いなことでしょう。あなたの家に住む人たちは。彼らは、いつも、あなたをほめたたえています。

（詩篇　84・1～2、4）

仕事を辞めた後

仕事を辞めた直後に、息子から「結婚したい」と告げられました。それに対して私の口からは、「主の前で結婚するのでなければ、私たちは出席できない」と、夫と同じことばが同時に出ていました。主が語らせてくださったと思います。ただちに、イエス様は息子を祈りへと導いてくださいました。「祈りの部屋」のローソクの灯の下で息子と三人で祈る初めての日となりました。

素直に親に従い、イエス様に従おうとした息子でしたが、いつの間にか遠く離れてしまいました。親に従おうとしない息子に妥協はできませんでした。息子は、二年間の沈黙の戦いの後、「こんな家、出て行く」と声を荒げたのですが、その後に悔い改めに導かれました。主は、結婚を祝福してくださいました。息子のあいさつは砕かれたへりくだったもので、二年間の苦しみが息子を成長させてくれたと思わされました。息子は「イエス様に頼るしかない」とイエス様を畏れる者となり、子どもと共に礼拝に集っています。家族全員が永遠の命をいただいて、天国で待っている珠生とともに、主にある一つの家族として結ばれていることは、感謝です。

もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

（マタイ　18・19～20）

福音伝道

主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。

（イザヤ　55・7）

仕事を辞めた私にイエス様は何を望まれているのかを尋ねました。主は、「愛しなさい」と示されました。職場では子どもたちを愛で教育しようとしていたのですが、それは人間の愛であり、自己愛でした。本当の愛はイエス様の自己犠牲の愛であり、滅びに向かっている魂の救いを祈ること、イエス様を紹介することだと確信しました。家族・親族、自分のことは顧みずに正義を旗印として戦ってきた友たち、教育を熱く語り合ってきた友たち、たくさんの友人・知人のことを祈り続けていきたいと思います。よく友人たちから「布教活動しているの？」と尋ねられます。私はこの言葉には抵抗があります。「布教」という言葉には宗教のイメージがついてくるからです。「宗教ではありません。真理です。全人類が知るべき真理です」と叫びたいです。私たち夫婦は、姪の結婚式でイエス様をお伝えしたり、父親（萬吉）の仏教の葬儀で冊子やＣＤをお配りしてイエス様のお証しをしたり、「死は終わりではない」ことをお坊さんの前で堂々とお話をしたり、お寺での親しい友人の納骨式の席でイエス様の話をさせていただいたりしています。周りの人たちから見たら、きちがいのようでもあり、厚かましいものでもあると思います。しかし、祈りに答えてくださるイエス様の導きと御声に従うだけです。祈りと聖霊の導きがなければ何も起こらないのですから、たとえ嫌われてもよい、と思っています。

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても しっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。（２テモテ　4・2）

問題は今、そしてこれから

相変わらず罪だらけの私です。ただイエス様にお頼りし、すがるしかない者です。

夫婦の関係については問題が残っています。私は、大きな事柄では夫に従えても、日々のことにおいてはなかなか従えません。家族のことで悩むときも、主を信頼してお委ねすることを忘れ、心を騒がし、自分の力で解決しようとする不信仰の罪を犯します。それでも、大きな問題が起こされたときには夫婦が一つになって、真剣に主を仰ぎ祈ることができることは、本当に幸いです。イエス様の十字架に立ち返ったとき、赦しと愛につつまれ、励ましと慰めを与えてくださるイエス様の愛を体験させていただいています。

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

（マタイ　6・24）

娘が遺した日曜学校のノートに、「もし、あなたがノアだったらどうしますか」の問いに、娘は「それでもイエス様を信じてください」と言うと書いてありました。罪と葛藤しながらも、「福音を宣べ伝えよ」とのみことばに従って走り続けたいと思っています。

神澤圭子
一九四六年　山形県天童市に生まれる
天童市立藏増小中卒、山形県立山形北高校卒、山形大学教育学部卒
横浜市立十日市場小学校赴任、相模原市立大沼小、若草小、中央小（退職）
夫・毅（たけし）　長男・哲郎（てつお）、妻・泰代（やすよ）、孫・鷹（よう）、鈴音（すずね）

共におられる主

鈴木　勇士



左から勇士さん、姉の陽子さん、妹の美麗さん、お母さまの世喜子さん、お父さまの力さん

私は一九九一年に神奈川県相模原に生まれました。姉・陽子（ようこ）、妹・美麗（みれい）がいます。家族はみなクリスチャンです。私は、姉と妹を見て主の愛を学んできました。姉は本当に主を恐れていて、人の悪口を姉から聞いたことがありません。また私と妹を愛して、見守ってくれています。妹は自分の罪を自覚しつつも、主イエスのみことばを心の楽しみとしています。自己を見つめて泣くのではなく、主を見上げて喜ぶことを知っているようで、非常に元気です。妹は家族のことをよく祈り、家族全体を祈りで支えてくれています。妹から学ぶことは多々あります。

私たちは仲がよく、会話が絶えない、楽しい兄弟姉妹です。主が姉と妹を与えてくださったことを感謝しています。もし未信者の家庭に生まれていたなら救いの劇的な体験があっただろう、と心に思ったこともあったのですが、今では、「私の恵みはあなたに十分です」と主に言われている気がします。主に感謝しています。

幼かった頃に、聖書物語という本で知った人物で、とても心惹かれた人が何人もいます。その中で特に印象に残っている人は、イエス様が十字架上で息を引き取るのを目撃したローマの百人隊長です。

新約聖書ルカ伝の23章47節に「この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、『ほんとうに、この人は正しい方であった』と言った。」とあります。幼いながらもこの人に強く心を惹きつけられました。ローマ人であり、偉い人であったにもかかわらず、主イエスが息を引き取る状況を見て、心砕かれ主を認めたのです。「この人の信仰はとても素直だな、私はこんな人になりたい」と思ったことを覚えています。

七歳の誕生日に、祈りの母でいてくださった渡辺美和子姉妹から聖書をいただきました。その聖書の空白のページには、「主よ。お話しください。しもべは聞いております。」（1サムエル　3・9）と書いてありました。美和子姉妹が愛をもって書いてくださったこのみことばのように祈りたいと憧れており、また、百人隊長の素直な態度や信仰を与えてくださいと、祈っております。

小学一年のときに、私の家族は東京湾の新島で生活を始めました。新島には海も山もあり、肌で自然を感じ、遊びに夢中になって楽しい毎日を過ごしていました。子どもの私には天国のようでした。

小学三年のとき、群発地震で、頻繁に地震が起こりました。震度4の地震のときは本当に怖かったのですが、その後に震度7の巨大地震が起こりました。小学校の裏山は、四百メートルぐらいの切り立った山ですが、その山が一気に崩れました。大きな一枚岩が剥がれ落ちて、木がまるで側転をしているように転がりながら落ちていきました。自然を愛していた私にとっては、恐ろしい光景であり、また、ある種の美しさも感じました。そのとき「イエス様、誰も殺さないで」と、泣きながら何度も祈ったことを覚えています。

たとい山々が移り、丘が動いても、・・・わたしの平和の契約は動かない。」とあなたをあわれむ主は仰せられる。（イザヤ　54・10）

こんな小さな者の祈りを主は聞いてくださったのです。けが人はいたものの死者は一人も出ませんでした。この経験を通して、主は私に「わたしは在る」と語ってくださいました。四年生のときに東京都の青梅に引越しました。

御代田での中高生と若者の集いに参加したときのことです。ある兄弟が証しのなかではっきりと「私がイエス様を十字架に架けた」と言い切るのを聞きました。非常にショックでした。いつも日曜学校では、「主イエスは、私たちの代わりに十字架にかけられた」と聞いていたのですが、「私がイエス様を十字架にかけた」というのは非常な驚きでした。

私はベン・ハーという映画が当時大好きでした。イエス様が十字架をかついで歩くシーンで、イエス様に石を投げ、唾を吐きかける人たちを、殴ってやりたいと思いましたし、主人公のベン・ハーがイエス様に水を飲ませてあげようとするシーンに強烈に感動していました。そして自分もイエス様に水を運びたいと憧れていました。そう思っていたのに、実は私も石を投げつけ、唾を吐きかける人間であったのか、自分の中にそんな要素があったのか、と非常に悲しくなりました。そんなことを考えて悶々と生活していたときに、礼拝で聖餐が回ってきました。いつもは何も考えないで受けていましたが、このときは、はたして私はこれを受けていいのだろうか、と身体がフリーズしてしまいました。ところが突然、ベン・ハーの音楽と共に映画の中の十字架を思いだし、「イエス様ごめんなさい」と祈りながら聖餐にあずかりました。古い記憶なので曖昧なところはありますが、これが、私が主から受け取った最初の愛であったと思います。

中学、高校生の頃は、集会には行っていましたが、この世的な知識、価値観、自分の悟り、哲学に夢中になっていました。色々なことを通して主を体験的に知ることもでき、感謝なこともたくさんあったのですが、ムラばかりの歩みでした。聖書を読めば読むほど自分の罪が示されて、そこで主を見上げて祈ればいいのですが、なかなかそれができずにいました。正しくなれない自分に我慢ができない思いでいました。自分が傲慢な者であることに気がついていなかったのです。

高校三年生のときにあまりに苦しくなってしまい、精神的に疲れきっていたこともあって、突発的に自殺を考えました。夜の街を歩き、大きな橋の上まできて、飛び降りようと考えました。・・ただこの手すりを飛び越えればいい、簡単なことだと自分に言い聞かせていました。すると後ろにパトカーが停まり、「どうしましたか?」と聞いてきました。はっと我に返り、逃げ去るようにその場を去りました。

家に帰ると、自分がしようとしていたことを考え、椅子にしがみつきながらガタガタと震えていました。その時はっきりと、与えられた命を自分から絶つことは罪だと示されました。父が部屋のふすまを開け、優しく声をかけてくれました。私の頭は真っ白でした。

次の日、母親から電話がかかってきました、私の様子がおかしいと父が母に言ったようです。私は母に、「とても恥ずかしい、イエス様に対し恥ずかしいことをした、お母さんにもお父さんにも合わせる顔がない、自分はどうしようもない、家に帰る資格がない、集会にも行く資格がない、恥ずかしくて家に帰れない」と言いました。それまで黙って聞いていた母は、口を開き「やったー!そうよ、あなたは元々主の前に立てるような人間じゃないわ。イエス様の一方的な愛なのよ。ヤッホー良かったわね。やっと自分が間違ってるって気づけたじゃない。それが一番大事なのよ。だから悔い改めて祈りなさい。今日は帰ってきなさい」と言ってくれました。うちの母親は本当に嬉しいときにヤッホーって言うんです。この家族に生まれてきたことは感謝です。その頃に与えられたみことばをご紹介します。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。主の救いを黙って待つのは良い。人が、若い時に、くびきを負うのは良い。それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい。

主は、いつまでも見放してはおられない。たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。

わざわいも幸いも、いと高き方の御口から出るのではないか。生きている人間は、なぜつぶやくのか。自分自身の罪のためにか。私たちの道を尋ね調べて、主のみもとに立ち返ろう。（哀歌　3・22〜28、31〜32、38〜40）

とくに、26〜27節の「主の救いを黙って待つのは良い。人が、若い時に、くびきを負うのは良い。それを負わされたなら、ひとり黙ってすわっているがよい」というみことばは、一見厳しい言葉に思えるのですが、私にとって最高の慰めの言葉です。

去年、高校時代の演劇仲間が自分で命を絶ち、葬儀がありました。なぜもっと早く彼に聖書の話をしなかったのか。彼は昏睡状態の中で祈ったのだろうか。自分はなぜ人の目を恐れたのか。いろいろと自責の念が生まれてきて、悲しくなりました。彼が天国に凱旋できたのかは、わかりません。私自身、いまだにそのことから解放されていません。ただただ残されたご遺族の救いを祈るだけです。

大学での芸術活動のことでは、私は主のご栄光を自

分の手柄のように振舞っていました。周りからもちやほやされて、自分が主のご栄光を盗んでいることに気づかず、傲慢になっていました。本当に恥ずかしいのですが、まるで自分がなんでもわかっているかのように振舞っていたと思います。「オフサイドだね」と、ある兄弟が主のご栄光を盗むことを、サッカー競技でのルール違反にたとえて教えてくださいました。まさにオフサイドでした。知らないあいだに罪の負債がレンガのように積み上がり、身動きのとれない状態になっていることにすら気づいていませんでした。

なぜ、おまえは悪を誇るのか。勇士よ。（詩篇　52・1）

そんな中のある日、一緒に活動をしていた友人を罵倒してしまいました。そのときは日頃の鬱憤をはっきりと言うことができたと思ったのですが、すぐに自分が傲慢であったことに気づき、謝罪しました。しかしそれを境に、友人たちに連絡を取ることができなくなってしまいました。その頃は色々なプロジェクトに参加していたのですが、どこにも気持ちが向かわず、携帯電話の電源を入れることもできなくなりました。本当に苦しい期間でした。そのときにふと、小学生のときに聞いたメッセージで、ベック兄が「携帯電話には圏外があっても、イエス様との携帯電話には圏外はないよ」とおっしゃっていたことを思いだしました。このことを思い出したときからイエス様に祈り続けることができるようになりました。最初は自分のことしか祈れなかったのですが、集会のある兄弟姉妹が結婚すると聞いたときに嬉しくなって、落ち込み始めてから初めて他者のことを祈れました。

ある家庭集会でベック兄に、「どのように祈ったらいいですか?」と聞きました。するとベック兄は「いま尋ねてきたように祈りなさい」と言ってくださいました。それからそう祈ることにしました。その当時、与えられたみことばを紹介します。

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。（ハバクク　3・17〜19）

太陽がもうあなたの昼の光とはならず、月の輝きもあなたを照らさず、主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの光栄となる。あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかげることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。（イザヤ　60・19〜20）

けれども、私たちの国籍は天にあります。

（ピリピ　3・20）

妹の美麗は、祈りによって支えてくれました。二人で祈り会もできました。ある日、母が、「外の人たちと連絡とってないみたいだけど、主の前に静まれているみたいね」と言いました。私は苦笑いするしかありませんでしたが、静かなときを持つことができたことは本当に恵みでした。それからしばらくしてバンクーバー喜びの集いに導かれました。不安がいっぱいだったのですが、たまたま話しかけた兄弟が、話しやすくて、たくさんのことを教えてくださいました。兄弟は、ベック兄の「絶えず祈れ」に書かれている祈り方を教えてくださいました。この祈りを今、毎朝二回読んで祈ることにしています。一回目は「こんなふうに祈れない」と思いながら祈るのですが、その後に詩篇を読み、とりなしの祈りをし、自分のことを少し祈り、もう一度この祈りを読むと、一回目とは違って心に響くことに気がつきました。主はこのように、段階を踏んで祈り方を教えてくださいました。感謝です。

バンクーバーでは、私は主イエス様と婚約をしているのだ、と心から思うことができ、本当に恵みのひとときでした。帰国後、友人の誘いで演劇に出演することになりました。稽古期間中は失敗もあったのですが、祈って、主に頼りながら演劇をしていました。

仲のよい劇団だったのですが、長い稽古期間中に人間関係からトラブルが発生したようで、後輩たちの顔がどんどん曇っていくのが気になりました。私は、若い役者たちに発声訓練と身体訓練の指導をするようにと演出家から頼まれましたので、自分はダメな者だがクリスチャンであること、哀歌には朝ごとに主が作り替えてくださると書いてあること、これは凄い恵みなのだということを発声訓練のときに、祈りながら伝えました。すると皆の顔がパッと明るくなって、まるで油がさされた歯車のように、本番に向けて稽古が進みました。主に感謝しました。主は、演劇を通してたくさんの奇跡を体験させてくださいました。驚きの連続でした。私は十二年ほど演劇をやっているのですが、本番前にはいつもガタガタと震えが止まらなくなります。あるとき楽屋で聖書を開くと、主は次のみことばを与えて、勇気づけてくださいました。

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。

（ヨシュア　1・9）

長い公演期間が終わり、打ち上げを早めに切り上げ、うちに帰る途中、「ちょっと疲れたのでピットインさせてください」と祈りました。私はよく自分をF1マシーンに例えてピットイン（Pit in）させてくださいと祈ります。ピットインとは、F1でレースの途中、タイヤ交換や燃料補給をしたり、監督からの指示を聞くために休憩をとることです。主の前に一人静まる時間や交わり、キャンプ、礼拝などありとあらゆることを総称してピットインさせてくださいと祈ります。どういう種類のピットインが与えられるのかはわからないのですが、主は私に必要な主のタイヤを履かせてくださいますし、燃料を与えて休息を与えてくださいます。そのように祈った次の朝、聖書を開いたら、このみことばがありました。

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

（ヨハネ　14・3）

主が監督者になっていただき、主と共に走るレースは信じられないぐらい楽しく速く走れることがわかりました。そしてつねに主は指示を出してくださり、ピットインする場所を備えてくださいます。本当に感謝です。ゴールまで何年先なのかわからないですが、主の足元にひれ伏すことができる日を楽しみにしています。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

（ローマ　14・8）

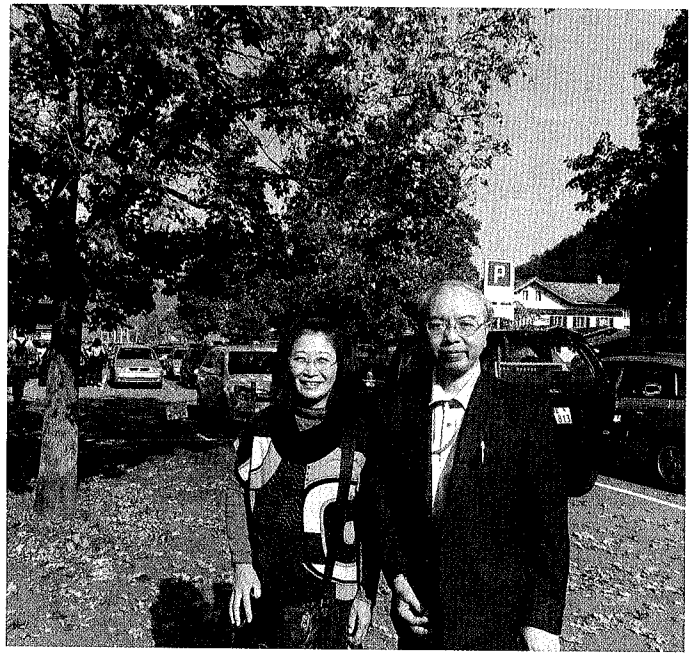
見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。

（マタイ　28・20）

鈴木勇士（ゆうし）
一九九一年、神奈川県相模原市生まれ
自由の森学園卒業、桜美林大学芸術文化学群在住
父・力（つとむ）　母・世喜子（せきこ）　姉・陽子（ようこ）　妹・美麗（みれい）

きょう救いがこの家に来ました

加藤 明美



夫の大典さんと

私は一九五四年、秋山政行、典子の長女として、山梨県韮崎市で生まれました。三歳半離れた妹まゆみとの四人家族でした。今回父のことを中心に証しさせていただきます。

父は秋田で紳士服の行商をしていました。一九七〇年頃に店を構え、二ヶ月に十日ほど山梨に帰る生活を続けていました。少しばかりの田畑があったので、母と私と妹は山梨に残り、三人の生活が長く続きました。

父は穏やかな人で、怒られた記憶はほとんどありません。一九八八年頃に店をたたみ韮崎に帰ってきましたが、四十年余り別居生活をしていたので、両親にとって生活を共にすること自体が苦痛であったようです。父は晩年、アルツハイマー型認知症を患い、いらいらして大声で怒鳴ったりするようになり、自分が変になっていくのを憂いていたように思います。一方、介護をしていた母は、毎日が戦いで死にたいと思ったことが何度もあったそうです。二〇二二年十月、母は町田喜びの集いで洗礼の恵みに与りました。

主は、父とも祈りを共にできるようにしてくださいました。ある時、広告の裏に、自分で鉛筆を削り、文章を十個ほど書いていました。集会の日めくりカレンダーで馴染みのみことばでした。

私は、・・・うしろのものを忘れ、・・・目標を目ざして一心に走っているのです。（ピリピ　3・13～14）

父は「勉強しているんだ。この言葉が一番好きだ」と言うのです。病気のため、字も忘れているだろうと思っていましたので、驚いてしまいました。また、クリスマスのCDを聞いている時のことです。日々の歌197番のグロリアになると、「アーメン、アーメン」と何度も言って眠ってしまいました。

二〇二二年七月、ベック兄姉、集会の兄弟姉妹の方々が実家に立ち寄ってくださいました。ベックさんは父と母のために非常に分かりやすく語ってくださいました。父は、最初はうとうとしながら聞いていましたが、途中から目を見開き、瞬きもせずに聞き入っていました。「イエス様を信じなさい。理解しなさいじゃないよ。多くの人は、今日も明日も生きたいと思うけれど、イエス様は最善の時に召してくださる。ごめんなさい。それだけでイエス様は赦してくださる。死は終わりではない」。父は、ベックさんのメッセージを全身で受けとめました。

きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。（ルカ　19・9～10）

二ヶ月後、山梨におられる姉妹と父と私とで祈った時、姉妹が父にイエス様のことを尋ねました。父は、はっきりと「昔は仏教、今はキリスト。明美が集会に行って

いるからお寺のお墓も処分した。難しいことは分からないが少しは分かる」と言いました。両親の承諾を得て八年前に処分した墓のことを言ったのです。イエス様が父の信仰をはっきり見せてくださいました。

その夜はとても暑い夜でした。私は父がいつも騒ぐので、ふすまを開けて隣の部屋で寝ました。「暑い暑い。寒い寒い」、大声で言いながら、娘を気遣うように扇風機の風を私に当てようとしていたのです。私は、父への感謝の気持ちでいっぱいになりました。父母を敬ったことも、優しい言葉一つかけることもない者でした。両親にしてきた一つひとつの事柄を思い出し、悔い改めました。イエス様に赦していただきたいと心から祈りました。

父は、老人ホームに入居して三ヶ月足らずの二〇一三年五月、お風呂に入り、妹のまゆみに好きなキャラメルを食べさせてもらった翌日、静かに召されました。遺言として「葬儀に関すること。式はキリストでお願ひします。他はみんなと同じようにしてください。明美に全(すべ)てまかせます」と記してありました。韮崎市の中でも竜岡町には古い組(町内会のようなもの)のしきたりが残っている地域で、父の遺体が実家に着くとすぐに組長さんが来られ、その日の夕方には組の方々、親戚の方々四十人近くが集まり、葬儀の話し合いがなされました。この地域では葬儀委員長は組長、進行も組の役員が執り行うように決まっています。

夫が「葬儀は聖書に則(のっと)ったキリスト集会式で行いたい」と告げると騒然としました。「キリスト教じゃ、いったい自分らは何をしたら良いか」と声を荒げる人や、怒鳴る人もおり、私たち夫婦は主の栄光が現されますようにと祈り続けました。葬儀屋さんが葬儀の手順をプリントし、配って説明してくれましたが、納得できないという険悪な雰囲気になりました。しかし、遺言を読み上げると驚きと共に静かになり、「父の平安な顔と、写真を見ていってください」と告げると、賛美のCDが流れる中、みんな父の顔をのぞき込み、また何枚かの写真を見ていきました。そこにはみことばが入った写真もあり、「この家はキリストになったか」と言う人もいましたが、妹のまゆみが「そうです」ときっぱりと答えると、納得したように帰って行きました。

葬儀は、納棺、祈りの会、お別れ会、火葬と、聖書と賛美と祈りの中で進められていきました。親戚のひとりは、葬儀のベックさんのメッセージを聞き、真実の話が聞けて良かったと言いました。また葬儀屋さんの若い青年は、引き出物に入れた「主は生きておられる」をそっと読んでいました。山梨で集まりがある時には呼んでくださいと言われています。

山梨の葬儀では、会葬の方々は入り口で順番にお焼香するだけで、話を聞く習慣はないのですが、この葬儀では献花が最後でしたので、いらした方々は賛美、祈り、バイオリン演奏、福音メッセージとすべてを聞くことになりました。葬儀に関して文句を言って来た人は一人もいませんでした。むしろ、葬儀の引き出物の賛美のCDを聞いているとか、キリスト教に改宗したいくらいだ、との感想が聞かれました。父方のいとこは、近所の人が何か言ってきたら私が申し開きをするから心配せずに東京に帰るように、とも言ってくれました。父が生まれ育ち、愛してやまない韮崎市竜岡町の百二十人余りの方々に福音が語られたのです。まかれた種が、一粒でも二粒でも実が結ぶことを祈り続けたいです。

私と妹とは、三年ほど前から付き合いが途絶えていました。しかし、この葬儀を通して普通に親しく話しができるようになりました。母も妹も、悲しむというより、父が天国という一番良いところに行った喜びを感じていました。イエス様は私たち家族に対して隅々まで良くしてくださいました。

父の葬儀後、山梨に重荷を担っておられる集会の姉

妹たちによって祈り会が始まりました。小さな祈り会ですが、次のみことばが与えられ、山梨の兄弟姉妹のこと、親族友人の救い、家庭集会や礼拝が与えられること、などを祈っています。

だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。

（使徒　18・10）

同年八月に町田で父の納骨式が行われ、山梨から叔父、叔母、いとこたち、私の幼なじみがマイクロバスで来ました。妹の友人も出席しました。暑い日でしたが、合わせて二十五名ほどの親族家族と多くのキリスト集会の兄弟姉妹が集まってくださいました。集会の兄弟と母の義妹が小学校の同級生であることが分かったり、集会にどうして入ったのかと集会の兄弟に聞くいとこもいました。母の弟は「仏（ぶつ）に行く時笑ってはいけない、しゃべってはいけないのだが、ここでは皆にこにこしているのでつい笑ってしまう」と言っていました。一度ゆっくり会いたいと言ってきたいとこもいました。

それから一ヶ月ほど後に、母の妹が召され、山梨で葬儀があり、また親戚と会うことになりました。私と母は、ベールをかぶり備えることができました。親族は今までになく暖かく、無理しなくて良いと言ってくれ、集会のことやお焼香、ベールのことを聞いてきました。親族に短期間に三回も会うことになり、一人ひとりの悩みや苦しみを知りました。

私はいとこたちの中で最も年上であったことから、自分を目上の者か何かのように思い込んでいたのです。私は本当にどうしようもない者であると気づきました。少しずつ心を開くようになった長女から、静かにはっきりと、「おかあさんは独裁者だったよ」と言われた時、自分は確かにそのような者だったと思わされました。家族のとげは、他のだれでもなく、この私、この私にあったことを心の奥深くから知らされました。夫、妹、長女、両親、主人の両親、主人の兄弟にとって、私の中にトゲがあったのです。イエス様、赦してください。私には自分でこのトゲを抜くことができません。どうかこの愚か者のトゲを抜いてくださいと心から祈るものです。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

（1ペテロ　2・24）

イエス様と出会うことによって数え切れないほどの恵みをいただき、ここまで来ることができたことを心より感謝します。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。…主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1～2）

加藤明美／山梨県立韮崎高等学校、玉成保育専門学校、東洋英和女学院短期大学保育専攻科終了
夫・大典（だいすけ）、長女・真奈（まな）、次女・蝦名恵真（えびなえま）、長男・言（げん）

主からいただくあふれるばかりの恵み

竹原 庸光



左から庸光さん、妻の京子さん、成典さん、通子さん、詩歩ちゃん

私は一九四六年、瀬戸内海に面した広島県三原市で生まれました。中学二年生のとき、東京の学校に進学するため両親の許を離れて上京し、祖父母の家から中学校に通うことになりました。当時の進学校である都立小山台高校を受験する直前、祖父母の家は引越しすることになりました。わたしは受験を控えて困りましたが、担任の先生のご厚意で先生の家に下宿させていただくことになりました。おかげで私は希望の高校に進学することができ、さらに希望の大学にも進学することができました。

一方、妻の京子姉は私より一歳年下です。妻も沖縄から両親のもとを離れて上京し、私が通っていた中学校に転校しました。私は音楽の先生の家に下宿、妻は数学の先生の家に下宿、ともに池上線雪谷大塚駅の近くに住んでいました。大学生のとき、双方の先生と一緒にスキーに行く機会があり、そのときはじめて妻と知り合いました。その後は住んでいる場所が近いこともあり、二人で時を過ごすことが多くなりました。妻が通っていた高輪教会に行ってみませんかと誘われ、私は初めて教会へ行きました。オルガンで演奏されたバッハの曲が大変印象に残りました。その後何度かオルガン演奏に惹かれて高輪教会に行きました。

私は大学院で「高速度写真」の研究をしていましたので、写真関係の仕事をしたいと思っていました。富士フイルムに就職が決まり、卒業と同時に結婚し、工場がある南足柄市に住むことになりました。そこで三人の男の子が与えられました。当時、私は写真フイルムの製造技術の開発、その後フイルム現像装置の開発を担当していました。仕事に没頭し、夜遅くまで仕事をしていました。しかし休日になると、会社の仲間とゴルフ、テニス、囲碁など、趣味に熱中し、家庭のこと、子供のことは妻に任せきりでした。末の子が幼稚園に入ると妻は三人の子を連れて近くの教会に通うようになりました。そのうち妻は教会学校の先生、婦人会会長、会堂建築委員などいろいろな役職について、大変忙しく教会の奉仕活動をしていました。

私は病気や精神的な悩みに苦しんだこともなく、また良き妻を得て結婚生活に苦労することもなく、神様に頼りたいと思ったことはありませんでした。妻は私に対して礼拝に出るよう無理に勧めることはありませんでした。しかし、家のなかには聖書やキリスト教の本がたくさんあり、長年にわたって妻が何気なく話す聖書の話などを聞いているうちに、妻がこれほどまでに信じているキリスト教について知りたいと思うようになりました。そして教会の礼拝に出席してみました。しばらくして牧師に勧められて聖書勉強会にも参加するようになりました。そのうち、洗礼を受けたいと思うようになりました。教会では洗礼を受けるためには、受洗勉強会に出席しなければなりません。受洗勉強会の最終回に教わったことは次の信徒の心得でした。「礼拝休むな、遅れるな、献金忘れ

ず、奉仕に励め」。すでに妻はこの心得のとおりに実行していました。私は受洗して、正式に教会員となり、教会の奉仕活動を始めるようになりました。

やがて三人の子供たちは皆大学生となり我が家を離れていき、夫婦だけとなりました。しばらく穏やかな日々が続いていましたが、突然、沖縄県立芸術大学で油絵を学んでいた次男・由貴（よしき）が精神的な病を患って我が家に帰ってきました。私たち夫婦は、どうしたらよいか途方にくれました。教会では、次男の病気のことは伏せておきましょうと言われて悶々とするばかりでした。

そのようなとき、富士フイルムを退職された梯上さんに電話をする機会がありました。そのとき「自宅で厚木家庭集会があり、ベックさんが来られるから来てみないか」と誘われました。梯上さんが退職されるときに「光よあれ」をくださっていましたので、ベックさんのお名前は知っていました。ベックさんのお話が聞けるならぜひ伺います、と返事しました。妻にも一緒に行こうと誘いましたが、妻は行きたくないと言ったので、一人で出かけました。ベック兄のメッセージは教会で聞いていた説教とはまるで違う内容でした。初めて来た人の自己紹介で「ベック先生」とお呼びしたら、ベック兄が「僕は先生じゃないよ」と言われたのが印象的でした。次男の由貴のことを話しましたところ、食事の交わりのときに兄弟姉妹が次々と話しかけてくださいました。教会ではタブーとして話さないような問題も平気で話しあい、皆さんが、問題を抱えながらも生き生きとして喜んでいる様子に驚きました。皆さんと交わって、私は重荷から解放され、気持ちはすっかり楽になりました。家に帰ってニコニコしながら妻に「由貴のことは大したことじゃないよ。集会に来ている人はいろいろな問題を抱えているけど、喜んでいて顔が輝いていたよ。これからは集会に一緒に行こうよ」と言いました。私の変わりようをみて妻はすぐに集会に行ってみたいと言ってくれました。

集会に導かれてからは、家族そろって救いの道を歩み始めました。由貴は、同じ病院に入院していた十五歳年上の玲子姉と共に集会に導かれ、一九九五年八月、御代田で結婚式を挙げました。私たち夫婦にとっては本当に想像できない結婚でした。結婚後、二人は沖縄に行き、由貴は卒業制作の油絵を描きあげて卒業することができました。二人は沖縄集会の兄弟姉妹にも守られて無事過ごすことができて感謝でした。

私の父・今道、母・登代子は神戸市灘に住んでいました。一九九六年、ベック兄が神戸に来られて集会が開かれました。このとき、母が、私のいとこにベック兄に会うことを勧めました。いとこは原因不明の腰痛に悩まされていてやっとの思いで集会に来ました。集会が終わると、芦屋の家庭集会、そして翌日は堺の喜びのコンサートなど、まるで腰痛がなかったかのように喜んで参加しました。これをきっかけにいとこの両親も救われました。

父は時々神戸集会の礼拝に出席していましたが、二〇〇四年肝臓癌にかかり召されました。神戸集会で葬儀をしていただき感謝でした。父が召された三年後に、母は脳梗塞で倒れ、入院中に急性肺炎にかかり召されました。母の希望どおり東京の吉祥寺集会で葬儀をしていただくことができて感謝でした。

三男・成典（せいすけ）は、同じ大学で知り合った通子姉と付き合っていました。ところが成典は、突然お父さんを亡くして悲嘆にくれている通子姉のことをどうすることもできず、悩んでいました。通子姉が初めて渋谷の家庭集会に導かれたときのことを、ベック兄は一九九九年三月、結婚式のメッセージの中で次のように話してくださいました。

「通子姉は初めて集会に来たとき、その日イエス様のことを聞いただけではなくて、やっぱりイエス様は私のために死んでくださった、有難いと思うようになり、

信ずるようになったんです。成典兄はいい女性と出会ったと思ったんです。彼はそのとき結婚については考えなかったと思う。僕は一緒になればいいと思っちゃったんです。主がこういうふうに導かれたのは本当に有難い。イエス様は私たちの代わりに死なれた、人間の受けるべき天罰をお受けになった。これを理解できる人間はいません。いくら考えてもピンときません。けれども信じる者は幸せです。なぜならば結果として希望を持つようになるからです。行き先は決まり、天国です。もう心配する必要はない」

成典と通子が選んだみことばのとおり、ふたりの結婚は大いに祝福されたものとなりました。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

（ローマ　5・5）

結婚して九年目に待望の初孫を授かりました。名前は詩歩（しほ）といいます。孫とは言いようもなくかわいいものであることを実感しています。

集会に導かれた当初は驚きの連続でした。集会の案内に、「牧師制度がありません。組織も、会則もありません。会員制度がありません。献金制度がありません」と書かれています。最初は不思議に思いました。しかしすぐに、一人ひとりが直接イエス様とつながっている様子を目の当たりにして、この集会はイエス様を頭とした本物の集いであることを確信しました。

教会と違って集会では、一人ひとりが、自分ができることを自発的に喜んで奉仕していました。私は集会に導かれてから、主にある兄弟姉妹の笑顔がすばらしくて、集会の兄弟姉妹の写真をとるようになりました。そのうち集会の結婚式や葬儀の写真撮影を頼まれるようになり、喜んで写真撮影をさせていただいています。また集会は賛美に満ち溢れています。私は妻

とともにすぐに合唱団に加えていただいて、現在も各地で開催される喜びへのコンサートで賛美できる恵みに与かっています。さらに全国いたるところで家庭集会や海外キャンプが行われていることも驚きでした。各地の家庭集会を巡り、また海外キャンプにも参加して、主にある多くの兄弟姉妹との交わりに感謝しました。二〇〇一年ベック兄が我が家に来られたとき、ソファーに座って「ここでメッセージするとちょうどいいね」と言われました。それから一年後、厚木家庭集会を引き継いで、我が家で秦野家庭集会が開かれることが現実のものとなり、現在に至っています。

集会に導かれて、生けるまことの神に出会うことができました。そして家族や親戚の救いを目の当たりにして、主が生きて働いておられることを体験し、主からいただくあふれるばかりの恵みに感謝しています。

神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。

（2コリント　9・8）

竹原庸光（たけはら　のぶみつ）
一九四六年広島県三原市で出生。
広島大学付属三原小学校、東京都大田区立東調布中学校、東京都立小山台高校、東京大学工学部精密機械工学科卒業・同修士課程修了。富士フイルム（株）を停年退職
妻・京子（きょうこ）

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

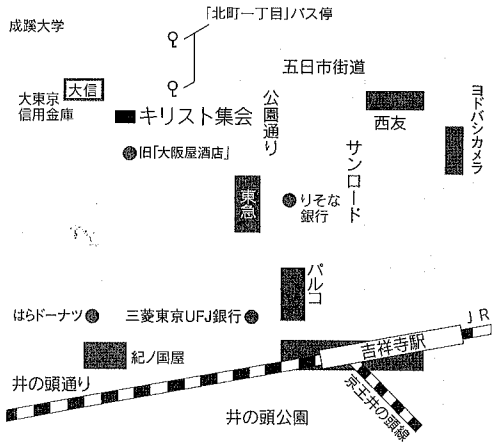
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

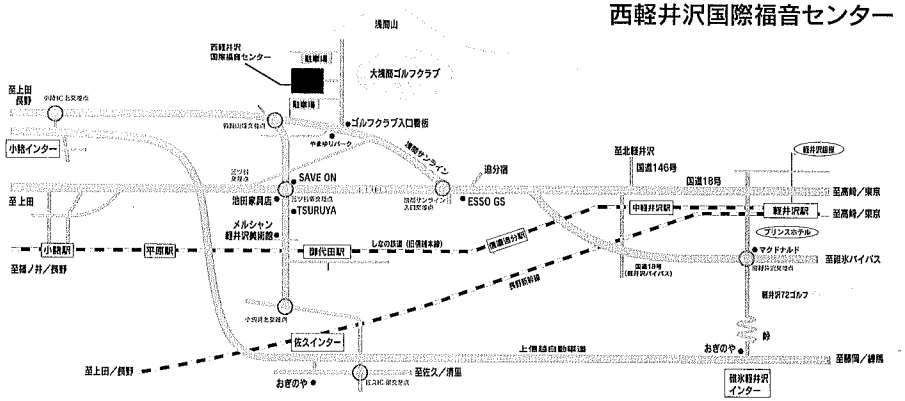
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450 (集会所)

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15 〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33 〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分(1000円程度)徒歩45分=3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

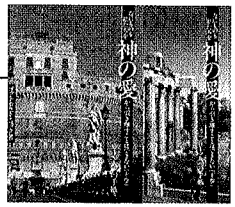


ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

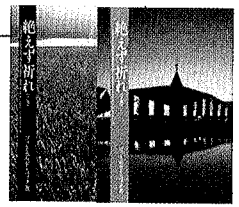
なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ (上・下巻)

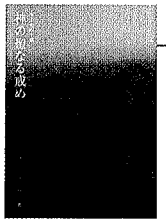


ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

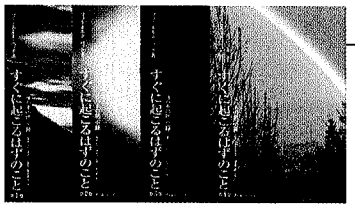
注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと ーヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ー私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。

主は生きておられる
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第33号

定価100円（税込み）2014年7月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

